

ロバート・バートン
『憂鬱の解剖』

第1部 第2章 第4節 第7項-第5節、第3章 第1節 第1・2項

岡村 眞紀子
川島 伸博 訳

第2章第4節第7項

その他多くの憂鬱症偶発因、友人の死、さまざまな喪失など。

偶発因が織りなすこの迷宮は、深く踏み入るほど、その道筋は複雑になる。くねくね曲り、脇道に逸れては、その脇道一つ一つが論じるべき原因を新たに提示する。これらすべてを風潰しにするのは、ヘラクレスの難行にも匹敵する大仕事、テセウスでもなければ遂行不可能である。ゆえに、私は自分の用意した糸を辿り、主要なものうちのいくつかを指摘するに留めておきたい。こういった偶発因の中で第一の座を占めるのは、友人の喪失やその死であろう。ビベスの知見によると「遊び、宴会、祝祭の後に塞ぎこむ人は多い」。こういう人は、仕事も遊びの予定もなく、たまに一人きりになってしまい、いつもの仲間と会えなくなると、憂鬱症になってしまう。少しすれば再会できることが分かっているにもかかわらず、友人が旅立つとなると、涙し、大声で泣き叫び、その姿をいつまでも目で追い続ける人もいる。その嘆きようは、まるで仔牛を連れ去られて啼く牝牛か、休暇が終わって学校に戻るのが嫌で悲嘆に暮れる子供のよう。「君が来てくれるのは嬉しかったけど、行ってしまうのは同じくらい辛かった」とは、友人アッティクスに宛てたキケロの言葉。ダ・モンテ（『診察』132）は、故郷を離れ、友人と会えなくなった田舎娘が、長年にわたってひどい憂鬱症に苦しんだ例を紹介している。またトラレスのアレクサンドロスが言及しているのは、夫の不在が原因で憂鬱症になった妻の例だが、この種のことは、世の妻にはよくある話である。夫の帰りが予定よりも一日長引いたり、約束の時間に戻らなかったりすると、彼女たちは、すぐに溜息をつき、涙を流して悲嘆に暮れる。あの人は追い剥ぎにあったに違いない、もしかすると死んでしまったかも、きっと何かよからぬことがあの人の身に起きたのだと嘆き、再び夫と出会うまでは、寝食もかなわず、心穏やかになることはない。友人や夫との別れ、あるいはその不在だけで、これだけ激しい影響が出るのだとしたら、その死がもたらす影響は計り知れない。死んでしまえば、永遠に離れ離れになり、この世で相まみえることはなくなるのだから。友人が死んでしばらくの間、人は痛烈に苦しみ、食欲がなくなり、生きていく気力を失い、喜びの火はすべて消え去る。深い溜息をつき、呻き声をあげ、涙を流し、

おお、いとおしき同胞、我が血脈、
ああ、我がぬくもり……かよわき花よ

と声を上げ、叫び、喚き、嗚咽する（「館に響いていたのは、嘆き声と溜息と女たちの金切声」）。また、よく物思いに耽り、「死んだ友の姿が目浮かび続ける」までになる。かの仲裁者、ピエトロ・ダバノは、母親の幽霊がつねに目の前に見えたと告白しているが、それと同じ症状である。「悲しみに苛まれる人々は、自分たちが必死に欲するものを、容易に信じてしまう」。すぐれた父や息子や妻や親友は、死んでしまっても、残されて悲しみに暮れる人々の頭の中に、つねに、いつも、ずっと去来し続ける。「魂全体が、この亡き人への思いに囚われてしまい」、プリニウスがローマヌス宛書簡で嘆くように、一年中、「亡きウエルギニウスの姿が見え、ウエルギニウスの声が聞こえ、ウエルギニウスと言葉を交わしているような気がする」ようになる。

ああ、君がいないと惨めな僕、百合は黒く見え、
薔薇は色褪せ、赤いヒヤシンスは甘く香ることなく、
銀盃花も月桂樹も、匂いをまったく放たない。

極めて忍耐強く落ち着いた人でも、このような場合には、悲しみの感情に激しく乱され、突き落とされる。普段は思慮深く立派な人たちも、しばしば、我を忘れ、子供のように何か月も泣きじゃくり、「まるで水と化してしまうかのごとく」だ。それでも決して慰められることはない。死んでしまった、死んでしまった、

黒き日に奪われ、酷き死界に落されてしまった、

残された私はどうすればいいんだ、と嘆き続ける。

私の涙の泉は涸れ果てた。いかに焚きつけたとて、
この苦渋の悲しみを表現する言葉も深いため息もなし。
この苦しみは、私の眼を潤らしてしまい、心を引き裂き
粉々にした。会いたいと嘆くことすら許されぬ。
私に重くのしかかる喪失の苦悩は、かくも大きい……。

典雅なイタリア詩人ストロツィは、父が死んだとき、その死を悼んで挽歌を作り、上のように嘆いた。彼は続けて吐露する。他のことであれば、自分は感情を抑えることができる。しかし、この感情は別だ。悲しみには、完全に屈してしまう、と。

もはや正直に告げよう。この悲しみに私は完敗なのである。崩れ去ってしまう、あの私の心が。不屈と粹がっていた元気も、堅固に思えた心も。

クインティリアヌスは息子を亡くしたとき、ほとんど絶望に陥るほどに嘆いた。カルダーノは一粒種を亡くしてしまい、『我が書物について』などで、何度もその死を嘆いている。兄弟が死んだときの聖アンブロシウスの嘆きも深い。「あなたのことを考えずにいることなんて私にはできない。涙なしに考えることなんて」、「ああ、昼間は苦しみに満ち、夜は悲しみに満ちている」。ニュッサの聖グレゴリウスは、かの高貴なる王女ブルケリアの死に際し、「おお、なんと麗しきお方」、「ようやく花開いたところでしたのに」などと嘆き、無敵の勇気を持ち主とされるアレクサンドロス大王も、クルティウスの伝記によると、親友へパイストーンの死後、「三日にわたり、地面に身を投げ出し、死のうと思ひ、頑として」食事をとらず、飲み物もとらず、睡眠もとらなかったという。エズラと親しかった女性は、息子が死ぬと、「荒野に出て行き、町に戻ってくることはなかった。彼女はそこに留まる決意をし、食べ物も飲み物もとらず、ただ嘆き、断食を続け、死んでしまった」（『エズラ第二書』10）。「ラケルは子供たちのために泣いたが、決して慰められることはなかった。というのも子供たちは死んでいたからだ」（『マタイ』2.18）。皇帝ハドリアヌスも、寵愛した青年アンティノウスの死を嘆き、ヘラクレスもヒュラスの死を嘆いた。オルベウスは妻エウリュディケー、ダヴィデはアブサロム（「おお、愛しの我が息子アブサロムよ」）、アウグスティヌスはその母モニカ、ニオベーは子供たちの死を嘆いた。特にニオベーの悲しみは凄まじく、詩人たちは、その悲しみによって彼女が感覚をなくし、石に変化するさまを描いている。また「アイゲウスは、息子が死んだという徴に動転し、海の中へ真逆さまに身を投じた」。こういった例は、現代の医者たちも多く紹介している。ダ・モンテが『診察』（242）で紹介するのは、夫の死が原因で、長年にわたりこの病気に苦しんだ患者である。トリンカヴェッラ（1.14）も、母親が亡くなった後、絶望同然の状態に陥り、「あやうく身投げするところまでいった」患者の例を挙げ、さらに第15診察では、「母親の死で自棄になってしまった」五十代の男の話を書いている。この男はファロピオの治療を受け、その後何年も通常の状態に戻っていたのが、突然、自分の娘を亡くして病気が再発、その後、回復することはなかった。この感情の激しさは凄まじく、ときに都市や王国をまるごと揺るがすこともある。皇帝ウェスパシアヌスが崩御すると、ローマ帝国内の人々がその死を甚く嘆き、アウレリウス・ウィクトル曰く、「都市全体が、嘆いていた」。アレクサンドロス大王は、親愛なるへパイストーンが死ぬと、哀悼の意を示すために、国民たちに家の胸壁を取り外させ、ロバと馬のたてがみを剃り落させ、またその道連れになるよう、多くの兵士たちを処刑した。こういったことは、今もお韃靼人の間で行われており、韃靼王が死ぬと、合わせて1万から1万2千の人間と馬が殺されることになっている。また異教徒のインディオの間では、主人が死ぬと、その妻と召使たちも、一緒に死ぬことを選ぶという。レオ10世の死も、ローマで甚く悼まれ、ジョヴィオの表現を借りると、「人々の安寧、皆の喜び」、平和、歓楽など

多くのものが、レオ 10 世と共に亡くなり、「あたかもレオ 10 世と同じ墓に埋葬されたかのごとく、嘆きの対象となった」。というのも、レオ 10 世の時代は黄金時代であり、彼の死後、続いたのは鉄の季節——「野蛮な暴力、無残な荒廃、あらゆる悪による恐ろしき災厄」、戦争、疫病、不満の時代——だったからである。パテルクルスの記述によると、皇帝アウグストゥスが死んだとき、あたかも天が頭上に落ちてきたかのような感じられ、「我々は、世界が壊れるのではないかと恐れた」。ビュデが記録するところによると、「ルイ 12 世崩御の際、変化はあまりにも突然であった。天に手が届かんばかりに栄えた人たちが、突如として、地を這うことになった。星の力にでも触れたかのごとく」。

心揺すられ、彼らは失意の底に落ちた。まるで、巨大な森が
落ちた葉を嘆くがごとく。——

彼らは切りつめられた木々のようであった。ロレーヌのナンシーで、フランス国王アンリ 2 世の娘で伯爵夫人のクロード・ド・ヴァロワが亡くなると、40 日間、すべての聖堂が閉鎖された。その間、祈りが捧げられ、ミサが行われたのは、彼女の遺体の安置された部屋だけであった。議員たちも皆、喪服を身に着け、「その後 12 ヶ月の間、この町では、歌うこと、踊ることが禁じられた」。

ダブニスよ、幾日もの間、牛たちに餌を与え、冷たい小川へ
連れて行く者などいなかったし、家畜も川の水を
飲んだり、牧場の草に口を触れさえしなかった。

我らがティトス、人類の至宝たる王子ヘンリが早すぎる死を迎えたとき、我々イングランド国民はどれほど影響を受けたことか。誰もが、王子の死とともに自分の親友がみな息絶えてしまったかのように感じた。アルバニアの英雄スカンデルベグが死んだときのエペイロスの嘆きもこれほどではなかったはずだ。マシュー・パリスは、カーナーボンで息子が生まれたという知らせを聞いたエドワード 1 世の喜びを描写するのに、「果てることなくお慶びになられた」と表現しているが、つまるところ、これとは反対に、友人の死に対し、我々は「果てることなく嘆き続ける」。キジバトのように、我々も仲間を作り、他とは切り離されて生きているので、友人の喪失の悲しみは辛く、永らく消沈することになる。

これとは別に、現世の所有物、財産を失うことによって生じる悲しみもあり、同様に人々を苦しめるのだが、この場合、その喪失に先んじてさまざまな苦しみが生じることもある。たとえば、時間の喪失、名誉、職、評判の喪失、希望の挫折などが先行し、これらも激しく人々を苛む。しかし、私見では、財産の喪失の苦しみは、これらの苦しみとは比べものにならず、この憂鬱症と

いう病気や症状を惹き起こしやすい。

金銭を失くしたときに流れる涙は本物。

人は金銭を失くすと、真の涙を流し、ため息を何度もつき、心から激しく悲しむので、しばしば持続性憂鬱症を惹き起こす。ガイネリオは『論攷』(15.5)で、「友人の喪失に加え、財産の喪失も——私自身、何度も目にしてきたのだが、財産を失くした人はそのことばかりを常に考えてしまうので——憂鬱症を惹き起こすことが多い」と述べ、これを憂鬱症の特殊因とする。ヴィラ・ノーヴァのアナルドゥスも、『診療概略』(1.18)で「財産を失くしたり、友人が怪我したり、死んだりすると」、憂鬱症になると述べる。貧乏になるだけで、狂ってしまうことがあるのだから、一文無しになれば、深刻で心うちひしぐ憂鬱症になってしまう。アイルランド人のように、金銭ゆえに、おかしくなってしまう人は多い。たとえば、すぐれた偃月刀を持っているとしよう。こういった人は、その高価な武器に傷をつけるくらいなら、攻撃を受けて自分が傷ついた方がましだと考えたりする。彼らは財産を失うくらいなら、命を差し出すのも憚らない。これが原因で生じる悲しみは長く続き、プラタ曰く、「何度も財産喪失が続くと、悲しみが習い性となる」。ダ・モンテとフリゲメリカが治療した22歳の若者は、不運にも金銭を喪失したことから憂鬱症になったという。シェンクにも別の例が載っているが、その男は、必要もない建築に財産を投じ、それが昂じたがために憂鬱症になったという。ソールズベリの金持ち司教ロジャは「国王ステイヴンから財産と領地を奪われ、悲しみの力に飲み込まれ、狂ってしまい、言動がおかしくなった」。こういった状況に陥った人が、精神的苦痛から自らの命を絶つというのは、よくある話だ。アウソニウスの秀逸なエピソードにある面白い例を紹介しよう。ある貧乏人が、首を吊ろうと出かけて行くと、金の入った壺を偶然見つけ、その場に首吊り縄を投げ捨て、喜んで家に帰っていくところが、

その壺を隠しておいた男は、この後、その金が見つからず、
そこにあった縄に気づき、その縄で首を縊って死んだ。

このような陰鬱な出来事を、貧困と金欠は生み出すのである。保証人として人の借金を取り立てられたり、海難事故や火事で財産が消失してしまったり、兵士たちに戦利品として資産を強奪されたり、いずれの場合も為すすべなく、同様の結果がもたらされ、個々の人間にだけでなく地域や都市にも荒れ果てた悲しみを生じる。カンナエの戦いの後、ローマ人たちは悲しみに打ちひしがれ、男たちは恐怖に凍りつき、愚かな女たちは髪の毛を掻き毟って泣き叫んだ。国王ラーズローと勇敢な兵士たちがトルコ人たちに殺されると、ハンガリー人たちは、「国を挙げて喪に服した」。カンブレ同盟戦争のときのヴェネチア人たちも然り。ルイ12世のフランス軍はヴェネチア軍をその勢力で圧倒していた。というのも、ヴェネチアに対し、フランス国王とスペイン国王と教皇

とローマ皇帝がカンブレで共謀していたからである。この状況下、議会にフランスからの使者が登場し、「ヴェネチア元首ロレダン殿」と開戦を宣言。この戦いによってヴェネチア人が失ったのは、パドヴァ、ブリクシア、ヴェロナ、フリウリなどのイタリア各都市、さらに大陸に所有していた領土であり、彼らの手に残されたのは、ヴェネチアだけとなった。ベンボ曰く「彼らはヴェネチアの町本体も奪われるのではないかと案じるほどであった」。「都市の住民全員が、未だかつてないほどの悲しみに、突如襲われたのである」。西暦1527年、ローマがブルボン公シャルルによって略奪された際、一般の兵士たちは見境なく戦利品を漁った。美しい教会は馬小屋のように荒廃し、古文書や書籍は床に散乱して馬の床となり、あるいは藁のごとく燃やされた。聖遺物や高価な絵画は台無しにされ、祭壇は破壊され、豪華な掛け布や絨毯は踏みつけられ、泥まみれになった。美しい女たちは既婚、未婚を問わず、卑劣漢たちに凌辱された。絞首刑執行人によって公場で犯されたセヤヌスの娘と同じように、彼女たちは自分の父親や夫の目の前で凌辱されたのである。貴族や裕福な市民たちは、自分たちの娘をいずれ君主の寵愛を受けるべく育てていたのだが、その子たちが、今や名も知れぬ兵士たちの娼婦となり、あるいは妾として囲われた。議員や枢機卿たちすら、町中を引きずり回され、凄まじい拷問を受け、金の隠し場を白状させられた。残りの人たちは殺され、通りに積まれたその屍の山は悪臭を放った。母親の目の前では、子供の頭が打ち割られ、脳味噌が飛び散った。ローマほどの立派な都市が、突如として略奪される光景は痛ましく、かつては歓楽の限りをつくしていた裕福な市民たちが、ヴェネチアやナポリやアンコーナに助けを求めるさまは嘆かわしい。「今なお天にも届かんばかりの豪華さを誇る宮殿が、一瞬にして、地獄の底まで落ちぶれたのである」。このような不幸に打ちのめされぬ人などいない。詩人のテレンティウスは自分の喜劇の原稿を載せた船が沈没したとき、自分もまた海に身を投げて溺死したという。貧乏な男が、粗末な食事を何度も続けてようやく貯めたなげなしのお金を、一瞬のうちに無くしてしまうとか、夥しい時間を費やして研究を続けてきた学者が、成果があがらず、その努力が徒労となるとか、こういった場合、悲しみにうちひしがれるしかない。この件については、最後にグレゴリウスの言葉を引用して終わりにしたい。「財産に執着すれば、我々は世俗のものに対する愛に苛まれ、財産が失くなると、同じくらい悲しみに苦しめられる」。

悲しみに次ぐものとして付言しておきたいのは、恐怖を惹き起こすある種の出来事についてである。というのも、恐怖の種類は無数であり、これまでに述べてきた恐怖とは別に、アリストテレスが恐怖の三大原因の一つとする、不吉なことに関する迷信があるからである。たいていの場合、恐怖は驚愕の事件や凄惨な出来事によって生じるのだが、この種の迷信にひどく悩まされる人は今なお多い。(何かよからぬことが起こる予感がするのだ。)たとえば、歩いている最中にうさぎが横切るとか、ねずみに服をかじられるとか。鼻血が三滴出るとか、塩入れが自分の方に倒れたとか、爪に黒い斑点が現れるとか、その種類は数多く、デルリオ(2.3.4)やアゴスティノ・ニフォ(「ト占論」、ポリドーレ・ヴェルゼル(『驚異についての対話篇』3)、ソールズベリの『ポリクラティクス』(1.13)が詳しく論じている。彼らは、不吉なことがあると激しく動揺し、想

像力と恐怖と悪魔の技で、「起こるかもしれないと危惧する不幸を自分の頭上に引き寄せ、自分が恐れている出来事に見舞われる」と、ソロモンは『箴言』(10. 24)で予言し、イザヤ(66. 4)も同様。そんなことは「無視して、馬鹿にしておけば、決して起こりはしない」のに。「病状が患者の精神状態に左右されるように、迷信の力は我々の頭の中にある」。我々がどのくらい信じるかによって、こういった迷信の力は強まったり、弱まったりするのである。クラト曰く、そういった人は「罰を避けようと思って、罰を受けてしまう」。つまり、罰を受ける原因は、まさしく罰を避けようとする自分にあるのだ。

我らは凶兆から逃れようとして、愚かにも凶兆に向かう。

ヨブ曰く、自分に起こることは、自分が恐れていたことだ。自分の運命に思い煩い、凶兆を見てしまったことに恐れ慄く人々については、言えることはたくさんあるが、まず言うべきは、「不幸が起こると予言されて思い煩う人は多い」ということである。特に占星術師や賢者から、天の怒りにより不幸な出来事や、死が起こると予言された場合などがそうであり、実際、こういったことは神の許しのもと行われることがしばしばある。クリュソストモス曰く、「彼らが悪魔を恐れるがゆえに、神は悪魔を生じせしめるのである」。皇帝セウエルス、ハドリアヌス、ドミティアヌスの生き様は迷信ゆえの恐怖が不幸につながることの証明となっているし、スエトニウスやヘロディアヌスなどの歴史書には、この手の奇妙な話がいくつも載っている。ダ・モンテは『診察』(31)で、こういったことが原因で並々ならぬ憂鬱症に陥った若者の例を挙げている。こういった恐怖に苦しめられる人はいつの時代にもつねにいるのだが、いわゆるでたらめ託宣やべてん司祭が原因となって惹き起こされる場合がある。ギリシア・アカイア地方のケレス神殿の近くには泉があり、そこには「糸で鏡が垂らしてあって」、いつどんな病気になるのかを知ることができたという。リュキアの泉にある紺碧の岩の間には、テュルクセウス・アポロの神託所があり、「ここでは、病気のことや健康のこと、他にも知りたいことを含め、あらゆる運命が告げられた」という。このように、人々はみな、いつも未来の出来事に惑わされてきたのである。今日でも、この手の馬鹿げた「未来に対する恐怖に中国人は激しく苛まれている」。イエズス会士のマテオ・リッチによる東洋諸国についての記録によると、世界中で中国人ほど迷信深い国民はおらず、この種の恐怖に、ひどく苦しんでいる。というのも、彼らはきわめて多くの事柄の決定をト占師にゆだね、「その恐れが現実となる」。ト占師が、ある日に病気になると予言すれば、彼らはまさにその日に病気になる。「恐怖の力に取りつかれた人たちは、病気に陥る」のであり、予言通り、死ぬことも多い。「死の恐れは、死より恐ろしい」という諺は正しい。幸運な金持ちの中にも、死の時のことを思うと「胆汁のように苦い」と言う人もいる(『集会の書』41. 1)。「死の恐怖は、我々の生活の平穩を乱す」。そして、我々を襲う疫病の中で、心を乱されることほど性質の悪いものはないのである。というのもこれまでに苦勞して手に入れてきたものすべて、大いに甘受してきたこの世の歡樂、真摯に愛してきた友人や仲間を、ひと時に失うのは悲しき別離だからである。哲

学者アクシオコスは、大胆で勇敢な人物で、生前、「死を軽蔑すること」、「この世の空虚さ」などについてすぐれた教えを残したのだが、実際に死ぬ間際になると、ひどく塞ぎ込んでしまい、「私はこの光を奪われてしまうのだろうか、これら善きものに見棄てられてしまうのだろうか」と子供のように嘆いた。その臨終の床にはソクラテスもいて、「友アクシオコスよ、いつもの己惚れた美德はどうした」と励ましたのだが、訪れる死の影に「臆病にも怯え、耐えられなくなって」、心が激しく錯乱した。ルキアノスの描く僭主メガペントゥスは、死ぬ間際になって縋るように言う。「運命の女神クロトよ、儂をもう少しだけ生き延びさせておくれ。そしたら、お前に千タラントの黄金をやろう。それに、儂がクレオクリトゥスから奪った二つの酒器もやろう。一つ百タラントは下らんはずじゃ」。またルキアノスには臨終の床で次のように言う人物も出てくる。「ああ、忌々しい。すべて残して逝かなければならないのか。これほど優れた領地を。これほど肥沃な土地を。こんなにも素晴らしい屋敷を。可愛い子供たちを。数多くの召使たちを。私の葡萄と麦を、これからは誰が収穫することになるんだ。これほど満たされた状態にあるのに、私は今、死なねばならないのか。これほどふんだんに与えられた状態にあるのに、すべて捨て逝かねばならないのか。まったく忌々しい。どうしたらいいんだ」。「愛しきお前、定まらぬ魂よ、ここからどこに行こうというのだ」。

恐怖と悲しみのもたらす苦悩の次に挙げるべきは、当然、好奇心、すなわち、気がかりが苛立たしいほどに支配的になる状態、「気になって仕方がない状態」である。トマス・アクィナスが定義するように、好奇心は「無益なこととその性質について思い巡す無駄な努力」であり、見えないものを見、することのできないことをし、知ることのできないことを知り、禁じられた果実を食べてみたいという強い渴望、あるいは一種の憧憬である。我々はしばしば、つまらぬことに従事しキリストから叱責されるマルタのように、自分には相応しくない無益な事柄に悩み、疲弊する。それが、宗教に関することであれ、文学、魔術、哲学、政治、いかなる行動、いかなる学問に関することであれ、好奇心は無駄な苦悩であり、単なる苦痛でしかない。しかし、大学の神学とは好奇心以外の何ものでもなく、多くの人々がこれに悩まされている。三位一体、復活、神の選別、予定説、永罰、地獄の業火などの概念、どれだけの人が救われ、どれだけの人が墮獄するのかなどなど、実に無駄な議論が繰り広げられる。迷信もまた、すべてくだらぬ儀式や仕来りを守っているだけにすぎず、われわれの哲学のほとんどは、臆見、些末な問題、命題、形而上学的用語の織りなす迷宮にすぎない。それゆえ、ソクラテスはすべての哲学者を「下らぬことで揚げ足を取り、狂気の一步手前にある連中、と公然と批判した」とエウゼビウスは言う。というのも哲学者はたいてい、「我々には知覚も理解も不能なもの」を追求するのであり、あるいは、それを理解したと思い込んでいるだけであり、つまるところまったくの役立たずだったのである。我々が、プレアデス星団の高さや、ベルセウス座やカシオペア座までの距離や、海の深さを知ったところで何の意義があろうか。学者がそんなことを追求したところで、我々が賢くなることはなく、たとえそんな知識を得たところで、我々が謙虚になったり、より優れた人間、より豊かな

人間、より強い人間になったりするわけではない。「我々を超えるものは、我々には無きに等しい」のであり、同じことは生誕星占いについても言える。占星術は、虚しき占時と予言、魔術はすべてやっかいな誤謬、危険な愚行、医術は、複雑怪奇な法則と処方箋、文献学は空虚な批評、論理学は無益な詭弁にすぎない。形而上学それ自体も複雑で瑣末な項目の寄せ集めにすぎず、不毛な抽象議論であり、錬金術などは誤謬の束に他ならない。あれほど浩瀚な書物が書かれることに何の意味があるだろうか。我々はなぜ、このような本を読むのに多くの月日を費やすのだろうか。このように無益で下らぬことに激しく思い悩まされる人もいるわけだが、それならば、むしろ野蛮なインディアンたちが完全に無学であるように、まったく何も知らない方がずっといい。「愚かなるは、下らぬことに努力すること」。釘を使わずに家を建てるとか、砂で綱を作るとか、誰の役に立つだろうか。好奇心に駆られる人は、探究し続けるが、聖アウグスティヌスが少年からかわれたように、三位一体の神秘を理解するようになるには、水が無くなるまで海を柄杓で掬わなければならない。彼らは観測し、時刻と季節の記録をつけ、皇帝コンラート3世に至っては、占星術師が男の子を身籠る時刻と告げるまで、新妻に手を触れなかつたりするのだが、何の成果があるだろう。ヨーロッパ、アフリカ、アジアを旅し、あらゆる川、海、町、山、湾を調べて回るのだが、それに何の意味があるだろう。かつてソクラテスが言ったように、岬にしても、山にしても、海にしても、川にしても、一つ見さえすれば、それで十分、すべて見たのと同じであるのに。錬金術師は、全財産を投げ打ってまで、賢者の石を大真面目に探し、あらゆる病気を治し、人々を長寿にし、勝利者にし、幸運にし、目に見えなくすらしようとするのだが、自分自身は、色よい話を持ちかけてくる詐欺師に騙され、出来るわけもないのに黄金を作り出そうとして、乞食になってしまう。好古家たちは、財力と時間を費やして、古い硬貨の一揃い、いくつもの彫像を収集し、また古代の巻物や御触書や写本などをかき集め、古のアテネやローマで何があったのか、古代人がどんな生活をしていたか、その食事、住居について知らないではいられない。また現在のニュースについても（僻地でのことには関心ないのだが）、誰よりも先に知らずにはいられない。どんな計画が打ち立てられ、どんな評議、協議が行われているのか、「ユノーがユピテルの耳に囁く内容」、現在フランスやイタリアでどんな布告が発せられているのかなど。主要人物は誰なのか、何処出身で、何処に向かっているのか、しきりと知りたがる。アリストテレスはエウリーポス海峡の潮流の動きの秘密を解き明かさずにはいられなかったし、プリニウスはベスピオ山の火山活動を観察せずにはいられなかった。しかし、この二人の辿った運命はどうだったか。一人は財産を失い、もう一人は命を失ったではないか。ピュロス王のような人はアフリカを征服すると、次はアジアを征服しようとするものだ。君主になりたいという人もいれば、不老不死になりたいという人もいる。富を求める人もいれば、覇権を求める人もいる。「都市には、野望が巨大な渦となって逆巻いている」。我々は、走りまわり、馬に乗り、朝早く起き、夜遅くまで眠らず、決して倦むことなく苦勞し続けるのだが、その実、ない方がいいものを手に入れようとしている。我々はお節介な「お邪魔虫」、忙しく立ち回っているのだが、それよりも静かに、じっと、安寧にしておく方がずっといい。言葉に拘る人もいて、自分の言葉を

——すべてモザイクのように、完璧に組み立て、

一つの音節も誤たぬようにするが、その内容は藁しべほどの価値もない。読者の多くは、これと同じように、衣服に拘り、流行を追い、簡素で上品であろうとするが、それも自分だけの問題で、人の役には立たない。言葉も衣服も同じこと。建物に拘る人もいれば、不思議絵や、複雑な設計図や図面を集める人もいる。やたらと肩書や学位や碑文に細かい人もいれば、食事に拘りすぎの人もいて、この場合は何々という高級ソースでなければならないとか、この肉にかけるドレッシングはどれだとか、その肉なら遠方から取り寄せねばならないとか、「外国産の鶏」はこう調理せねばならないとか、渴きを刺激するものを注文したかと思うと、その渴きを癒すものをすぐさま注文する。こうして、食にうるさい人は、法外な出費を重ねてまで、食の好みを満たそうとするのだが、いかなる食事であっても満足することは滅多にない。普通の胃袋の持ち主なら、すべて喜んで食べ、決して不満は漏らさないところなのだが。他にも冬の薔薇、季節外れの花、夏の雪解け水、旬が来る前の果物を欲しがる人、家の上に庭や池を作りたがる人などがある。これらはすべて普通のものとは異なり、複雑で珍しいものではあるが、それ以外は無価値である。好奇心旺盛な才人は、拘り性で、細かいことにやかましく、あらゆる職業、職種、行動、職務において、我慢できないことがある。しかし、それは気にならない人にしてみれば、なんら不快なことではなく、つまり彼らは、普通なら馬鹿にして無視するようなことを熱心に探し出しているということになる。このように、我々は愚かなる好奇心によって、苦しみ、魂を疲弊させ、分別をなくし、意志もねじ曲がり、自制も利かず、真逆さまに堕ちていき、無用な気遣いばかりをし、難儀に陥り、無駄な出費を重ね、疲労困憊のまま旅を続け、苦痛の時間を過ごすのだが、すべて終わった後、これらに何の意味があるだろうか、何の役に立つだろうか。

偉大なる師が教えたがらぬことは

知りたがらぬ。これこそ学ある無知。

このような感情、苛立たしい偶発因の一つに、不幸な結婚を数え挙げることができるかもしれない。結婚は、樂園において神自らによって定められた人生の条件であり、名誉ある幸福な状態、この世において人間に起こりうる最良の幸福なのであるが、それは結婚する二人が、然るべく和合し、セネカがその妻パウリーナと暮らしたように暮らすことができる限りにおいてである。しかし、もし夫婦の関係が不釣り合い、あるいは不和な場合、およそこれ以上の悲惨は考えられず、口うるさい女、ふしだらな女、淫らな女、あるいは、愚かな女、癩癩もち、魔性の女を娶ることほど、不幸なことはない。「この手の妻を娶るのは、蠍をつかむのと同じである」(『集会の書』26. 7)。「性悪な妻はひどい形相をし、その心も惨い、そんな妻と同じ屋根の下で暮らすくらいなら、獅子と一緒に暮らした方がましだ」(『集会の書』25. 25)。ジョヴァンニ・ボンターノの対話

篇「アントニウス」に出てくるギリシア人医師エウポルボスは、悪妻の資質を詳細に描写している。また、結婚する二人の間に年齢差がある場合も、同じような不幸が生じる。アウルス・ゲリウス(2.23)で引用されているように、喜劇の主人公カエキリウスは、老妻について不平を並べ立て、「あいつが死ぬのを待ちわびる間、俺は生きながらにして死んでいるのさ」と口にする。あるいは、結婚した二人が、いかなる場合もいがみ合うようなら、

不幸な結婚をした二人は、知っている、
いがみ合う二人の寝床がどうなるかを。

同様の不幸は女性にも起こる。

お父様、お母様、今度ばかりは惨めな私を悼んでください、
この不幸な運命から逃れるため、私は刃か綱をたよりに
死ぬことにいたします——

フェリックス・プラタの『観察』1巻によると、バーゼルの良家の若い女性が、自分の意志に反して、好きになりえないような年取った男性と結婚させられたのだという。その女性は、絶えず憂鬱状態にあって、悲しみのために痩せ衰えていった。夫は妻を喜ばせるべく、自分にできるありとあらゆることをしたのだが、ついに満たされることはなく、彼女は首を吊って自殺してしまったとのことである（この他にもプラタは似たような話をいくつも紹介している）。このように、結婚する二人の気質や性格が異なると、男は女に、女は男に苦しむこととなる。たとえば、夫が浪費家で妻が儉約家の場合、どちらかが誠実でもう片方が不誠実な場合など。親子関係についても同様で、親が子の心を乱し、子が親の心を乱すことはしばしば起こる。「愚かな息子は、母親にとっての重荷である」。また「理不尽な継母」と言うように、継母が家族全体を悩ますことは多く、まさに悔恨すべき事柄、忍耐の訓練、口論の燃料であり、再婚相手が原因で大カトーは息子から責められた。「父上が、ご自分の秘書サロニウスの娘、年端のいかない娘と再婚して私の義母にする理由は何ですか、何か不都合のことをなさって、そのために再婚なさらなければならないのですか」と。

不親切で非道な友人、悪質な隣人、劣悪な召使、借金、諍いなども偶発因として考えられる。スパルタの賢人キロン曰く、「借金と諍いに伴うのは不幸である」。保証人契約は、多くの家族の破滅のもとであり、「保証人になると、破滅はすぐ目の前」。「他人のために保証人となる者は苦しみ、保証人となることを拒む者は、安らかである」（『箴言』11.15）。隣人や友人との諍い、口論、訴訟、仲違い——『気違い沙汰の不和』（ウエルギリウス『アエネーイス』6.280）も人を苦しませ、その魂を苛む点においては借金と同じである。ボテロが主張するように、「こういった心

配事や苦しみや不安でいっぱいの人ほど悲惨な人はおらず、まるで刃先の鋭い剣で突き刺されたかのごとくであり、つねに恐怖、疑心、絶望、悲嘆に襲われる」。現在のウェールズに、この種のことで互いを消耗しあう著作家たちがいることは、よく知られているが、どこの誰であろうと、諍いをする人たち、特に訴えられて敗訴したり有罪を宣告されたりする場合には、似たような症状がみられる。聖エウスタティオスによって司教の座を追われたアリウスは、異端扱いされ、その後、不遇な人生を送った。追放の憂き身はどれも似た境遇である。「なんと大きな希望を私は失ってしまったのだろう」。不名誉、汚名、誹謗によって、これほどまで苦しめられ、その苦しみは長きにわたって続く。ギリシア詩人ヒッポナクスは諷刺詩を作って、二人の画家を激しく中傷し、非難したのだがプリニウスによると、「二人とも首を吊って死んだ」という。反発にあい、危険にさらされ、難局におかれ、満たされず、不安を抱えたまま生きるのも、同じくらい辛い。「こんな状態で君は眠ることができるだろうか」。こんな状態にあって安らかな人などいない。また、相応に認めてもらえなかったり、忘恩行為にあったり、友人に裏切られたりすると、心乱されたり、苦しんだりする人もいる。不親切なことを言われて、苦しむ人は多い。態度が無礼だったり、反応が酷だったりすると、とりわけ立場の弱い女性は思い悩む。特にむっつりとした夫のひどい言動は、胆汁のごとく苦く、とても耐え忍ぶことができない。パーゼルのガラス職人の妻は、自分が死んだら再婚すると夫から言われて憂鬱症になった。諺にもあるように「つれなさほど切れ味鋭いナイフはない」。特に宮廷人や、要人に付き添う人にしてみれば、しかめっ面をされたり、ひどい言葉を言われたり、失礼な態度を取られたり、眉に皺をよせられたり、睨みつけられたりするということは、即刻、死を意味する。

気分は主人の顔色次第で浮き沈み。

あるいは、普段の会話や振る舞いの中で、意図せず出しゃばり過ぎてしまい、そのせいで秘密がばれてしまったり、そのために不利な立場に追い込まれたり、不名誉を被ったりして、万策尽きてしまう人もいる。ロンスが『医学書簡集』(3)で報告する25歳の良家の女性は、女友達と仲違いし、秘密にしていた汚点（それが何であるかは言わない）を公の場で非難され、そのために激しく嘆き、すぐさま「孤独を求め、すべてを遠ざけ、ついには重度の憂鬱症に陥り、痩せ衰えた」という。これと同じように、人から拒絶されたり、軽蔑されたり、馬鹿にされたり、見くびられたり、恥をかかされたり、軽んじられたり、低く評価されたり、「仲間に先を行かれてしまう」と苦しむ人もいる。ルキアノスの『饗宴』に出てくる哲学者ヘトイモクレスは、自分だけ招待されなかったことが不満で、饗宴主催者のアリスタイネトスに長い手紙を書き、そのことを滔々と非難する。プルタルコスには、自分が上座に座してもらえないのが気に入らず、その宴席には決して座ることなく、怒って帰って行く高官が出てくる。これと似たような諍いは、たとえば、どちらが壁側を歩くとか、どちらが前に立つとか、我々の間でもよくあることで、しばしばみられる。こういったことは、それ自体、極めてくだらぬことで、まったく重要ではないのだが、我々

は、これが原因でしばしば不機嫌になり、いらいらした気分になってしまう。軽蔑や不名誉ほど、人の心に深く突き刺さるものはないのであり、特に、高貴な生まれの人の場合、馬鹿にされたり、悪口を言われたりすることほど、応えるものはない。これをクラトは『診察』(2. 16)で例証しているが、これが正しいことは日々の経験からも明白である。これと同じ性質をもつのが、迫害である。「迫害は確実に人を狂気に陥れる」(『集会の書』7. 7)。自由を奪われて、ブルータスは自分の命を投げ出し、カトーは自殺し、キケロは「楽しいことはすべて、永遠に失われてしまい、私の心は砕け、私は今後、決して目を上げることなく、楽しむことはないだろう。この喪失はとも耐えられない」と不平をもらした。追放は、テュルタイオスがエピグラムに記すように、大いなる不幸であり、

惨め極まりない。祖国を失い、乞食をしながら
 一軒一軒彷徨い、脅えた声で食べ物を求めるのは。
 みなから無視され、人に近づくと、いつも
 追い払われ、つねに蔑まれ、孤独に貧し、うち倒れる。

エウリピデスの『フェニキアの女たち』でポリュネイケスは、母イオカステに追放された身の不幸を五つ数え挙げ、その中でもっとも楽なもの一つだけでも、臆病な人間であれば落胆してしまうのに十分だろう、と述べる。この他にも自分の身体や心の弱みや欠陥を強く意識しすぎると、まるで長期間にわたって病気であるかのごとく萎えてしまう。

嗚呼、幸いなる健康、君がいると、美しき春が
 恵みにあふれ花咲き、君がいないと、誰もが不幸。

幸いなる健康よ、「汝はすべての黄金や財宝にまさる」(『集会の書』30. 15)。貧乏人にとっての財産であり、裕福な人にとっての至福、君がいなければ、幸せはありえない。なにか忌まわしい病に見舞われ、人からは疎んじられ、辛い思いをする。たとえば、息が悪臭を放ったり、四肢に障害があったり、せむしだったり、片目、片脚、片手だったり、病的に青白かったり、赤味がかっていたり、痩せこけていたり、禿げていたり、脱毛症になったりする。自分自身、「抜け毛に」少なからず悩んでいたシュネシウスは「毛が抜け始めると、心に凄まじい衝撃が走る」と言っている。アッコという老女は、おそらく、良家の女性の多くがそうであるように、いつもは綺麗に見せてくれる偽りの鏡を使っていたのだろう、たまたま本当の姿を映し出す鏡で自分の顔を見てしまい、「心を病み、狂気に陥った」(ロドヴィーコ・チェリオ・リッキェリ 17. 2) という。ウルカヌスの息子プロテアスは自分の不具を馬鹿にされて、火の中に飛び込んで死んだ。コリントの絶世の美女ラーイスは年をとると鏡を見るのが耐えられなくなり、ウェヌスに鏡を奉納してしまった。「今の自分がとても嫌、昔みたいな自分になれないから」。通例、美しい女性にとって、もっ

とも忌まわしいことは、年をとることと、衣服がみすぼらしいことの二つであって、苦痛の中の苦痛、考えるだけでも耐えきれない。

——嗚呼、神々のどなたかが、
我が望みを聞いてくれるなら、裸のまま獅子の群れの中に
私を差し出してください。
美しい頬が醜くやせ衰え、
この瑞々しい柔肌の身体が萎れてしまう前に。
私は美しい姿のまま、虎の群れの餌食となり
死んでしまいたいのです。

汚らしく、醜く、奇形であるくらいなら、生きながらに埋葬されたほうがましである。また美しくても、子供を産めず、そのことを気に病む人もいる。「ハンナはさめざめと泣き、何も口にすることなく、心乱れていたが、それもすべて彼女が子供を産めなかったためである」（『サムエル記上』1）。また「心深く苦悩した」ラケルは、「私に子供を授けてください、さもなければ私は死にます」（『創世記』30）と言うが、そうかと思うと子供がたくさんいすぎて困る人もいる。一生未婚のままで、そのことを悩む人もいるかと思うと、結婚していることこそが、悩みの種だという人もいる。自分の名が知られていないことに思い煩う人がいるかと思うと、その名を中傷され、誹謗され、侮蔑され、汚され、悪しざまに言われ、とにもかくにも傷つけられることに思い悩む人もいる。テレンティウス曰く、「中傷されて狂気に陥る人がいるとしても、別段、驚くこともない」。アリストテレスは怒りと軽蔑に関して十七の原因を数え挙げているが、ここでは長くなるので紹介しない。報せがないことに苛立つ人もいれば、報せがあって苛立つ人もいる。悪く言われたり、噂されたり、悪い報せを受けたり、嫌な話だったり、上手くいかなかったことだったり、あるいはまた、要求が満たされなかったり、希望が叶わなかったり、その実現が長引いたりすると思い煩う人がいる。ポリビオスによると、「何事においても、極めて厄介なのは、つねに、期待することである」。高貴すぎる身分に生まれたことに煩う人もいれば、卑しすぎる身分に生まれたことを嘆く人もいるし、人が苦しむ理由はそれだけで十分である。なすべきこと、人との交わり、仕事のないことに煩う人もいるし、世俗的な憂いや、厄介な仕事に苦しむ人もいる、などなど、すべてを言い尽くすことなどとても無理である。

ヒヨス、ベラドンナ、ドクゼリ、マンドレイクなど、ある種の肉や植物や根菜を知らず知らずのうちに口にすることでこの病気に罹る人も多い。以下はシチリア島アグリジェントで起こった話である。若い男たちの一行が宿屋にやってきて、たらふく酒を飲んだのだという。すると、その酒自体がまずかったのか、それともその中に何か混じっていたのか、原因はいまだ定かではないのだが、突然、彼らの頭は激しく混乱し、幻覚に襲われ、自分たちがいるのは船上で、嵐の

ために今にも難破しそうだと思い込んでしまった。そして、彼らは船が沈没して溺れ死ぬのが嫌なので、宿にあった物をすべて通りに——もちろんそこを海だと思って——投げ捨てたのだという。彼らの狂気は数か月にわたって続いたのだが、判事の前に連れてこられ、この事件について説明を求められると、(まだ狂気から回復していなかった)自分たちがしたことは、死を恐れていたため、すなわち凄まじい危険を回避するためだったと述べた。傍聴席にいた人たちは全員、彼らの愚かさに呆れ、じっと彼らを見つめていたのだが、そのとき、この一行の中でもっとも年長の男が、判事の前に跪き、大真面目な口調で、「おお、海の神々よ、私は」今もずっと「船底に叩き付けられているのです」と許しを乞うた。すると、今度は別の男が、同じく海の神々の名を列挙し、自分たちを助けてくださいと懇願、もし自分たちが再び陸にあがることができれば、必ずや祭壇を立ててお祀りいたします、と祈り出す始末。判事は彼らの狂気をしこたま笑い飛ばし、眠って忘れてしまうがよいとだけ命じ、法廷を後にしたという。このように、よくわからないが、憂鬱症が偶々発生してしまうことは多い。媚薬が原因となることもあるし、日射しのなか出歩いたり、狂犬に噛まれたり、頭部を殴られたり、タランチュラという蜘蛛に咬まれたりして憂鬱症になることもある。また、カルダーノ(『精妙さについて』9)とスカリジェ(『顕教的演習』185)を引用しつつ論じるシェンク(7巻「魔薬について」)の記述を信じるならば、イタリアのカラブリア州、プッリャ州では日常のことがきっかけで憂鬱症になった人がいるという。ジョヴァンニ・ポンターノの対話篇「アントニウス」には、憂鬱症の陽気な症状が記してあり、それによると、その患者たちは集団で踊り、音楽によって治療される。カルダーノはある種の石について、携帯して持ち歩くと、憂鬱症や狂気を惹き起こすのだと説明し、「身体を乾燥させ、心配事を増やし、眠りを減じる」堅硬石や透明石膏などを不幸の石と呼ぶ。ペルシアのクテシアスは、その土地にある井戸に言及しているが、その井戸の水を飲むと、「24時間、気が狂う」とのことである。別の項で詳細に論じたように、恐ろしいものによって正気を失う人もいるし、この場合、たとえば、ネプトゥヌスの海馬に恐れ慄いたヒッポリュトスや、ユノーの復讐に脅えたアタマスのように、命すら失うことも多い。しかし、これら偶発因の説明に関しては、どの論者も最後には等しく言う。

この他にもたくさん理由を挙げることもできるが、
家畜が待っているし、日も傾くし、もう行かねばならぬ。

この種の偶発因は、単独で考えれば、効力は小さく、憂鬱症を惹き起こすことは少なく、惹き起こすにしても少しずつでしかない。確かに樞の老木も一撃では倒れることはない。しかし、何度も何度も繰り返せば、どの原因もすべて十分な効力を発揮するのだ。また、実際よくあることだが、これらの原因が共起する場合、「統合されると力は増し」、「単独では害とならぬものも、集まると危険で」、大きな力を発揮する。アウグスティヌス曰く、「穀粒や砂でも数多く積み重ねれば船は沈み、水滴も集まれば洪水となる」。また何度も何度も繰り返されれば同様。ちょっとした傾

向も繰り返されれば、習性となるわけである。

第5節第1項

持続因、内向因、先行因、直接因、身体が精神にもたらす原因。

森林の中には入り込まず、その周りでのみ狩りをする人たちがいるが、ここまでの私はまさにそれと同じく、このミクロコスモスという森林の、周辺にある藪をつついて回っただけ、すなわち、外的偶発因を論じてきただけにすぎない。ここからは、より内奥へと分け入って行き、そこで見出されるべき直接的先行因をえぐり出していきたい。というのも、さまざまな外的要因や乱れがある中で、心の乱れが身体の不調を招くように、身体の乱れは、魂の不調を惹き起こすからである。身体と魂とでは、互いに対しどちらがより害を与えているのか判断するのは難しい。すでに述べたように、プラトンやキプリアヌスなど、魂を主たる原因と考え、身体を罪なしとする人もいるが、逆に魂を罪なしと論じ、身体を主犯格として責め立てる人もいる。後者の根拠は、ガレノスがその著で論じるように「性格は体質に従う」からであり、このことはプロスペロ・カラーニ『黒胆汁注解』、ヤーソン・ファン・デ・フェルデ「狂気について」、レメンス(4, 16)など多数が同意見である。またヴァルテルが『使徒ヨハネの書簡についての説教』(10)で注解する言葉は極めて正しく、色欲や原初的欠陥、性癖や悪質な体液は、我々ひとりひとりの根本に内在し、精神を錯乱させたり、悪影響を与えたり、さまざまな病気を惹き起こし、魂に繰り返し害を与える。「人はみな、己の色欲の誘惑を受ける」(『ヤコブ書』1. 14)。また我々が使徒、聖パウロの教えによると「心は強くとも、肉体は弱く、心に対し叛逆する」。こうなると蓋し、より害をなすのは魂よりも身体であり、身体が我々を動かす力は強烈で、「我々にはこれほどの力に抗い、立ち向かうだけの力がない」。実体のある身体が、実体のない魂に作用するのは、身体と魂のどちらにも関与する体液と精気を通して、あるいは変調をきたした器官を通してである、と論じるのはコーネリアス・アグリッパ(『神秘哲学』1. 63, 64, 65)、リーヴェン・レメンス(『自然の隠された驚異』1. 12, 16, 21「最良の生活指南」)、パーキンズ(『良心問題例解』1. 12)、ティモシー・ブライト(『憂鬱症論』10, 11, 12)である。というのもレメンス曰く、怒り、恐れ、悲しみ、侮蔑、妬みなどが「心の奥底を支配すると、身体に害を与え、ひどい病気を惹き起こすように」、身体の病も同様に魂に影響するからである。つまり病の主要因は心臓と体液と精気に由来し、これらが純粹であれば、心も純粹、不純であれば、心も不純となり、同様に病むこととなる。絃が一本おかしくなると、リュート全体の音がおかしくなるのと同様に、身体の器官が一つおかしくなると、他の箇所もすべておかしくなる——「昨日の欠陥をかかえた身体は、魂も一緒に押しつぶしてしまう」。身体は魂の住まい、仮住まい、宿である。篝火は、何を燃やすかによって、炎が美しくなったり、匂いが香しくなったりするが、それと同じように、魂は、それが宿る身体器官の調子にしたがって、上手く機能したり、不調をきたしたりする。ワインにはそれを保存しておく

樽の味がつくものだが、同様に魂はその容れ物であり、媒体である身体の色合いに染まる。この現象は、老人においても子供においても、ヨーロッパ人においてもアジア人においても、暑い気候帯でも寒い気候帯でも、同様に見ることができる。つまり、どんな人も四体液の量に従い、多血質の人は陽気、黒胆汁質の人は陰気、粘液質の人は鈍い気質となり、この体液に惹き起こされる感情には抗うことができないのである。実際、メラニヒトンが表明するように、人間の本性がもつこの病、すなわち憂鬱症になると、悟性は劣悪な感覚と深く結びつき、その感覚に囚われてしまい、その感覚を通してしか役割を果たすことができず、意志は薄弱となり、身体の部位を制御する力が小さくなって、身体に支配されてしまう。となると、私の結論はレメンズと同じく、魂を乱すという意味では「精気と体液が最も有害である」とせざるをえない。身体に粗悪な胆汁が大量に詰まっている人は、その体液にしたがって怒りっぽくなるのは必然、また体内に黒胆汁が詰まっていれば、憂鬱になることを避けられない。つまり、この病気や狂気、卒中や昏睡などが、体液から生じることは、おそらく否定できないのである。

我々のこの身体は、何らかの病によって大部分が不調をきたし、それによって内臓や体内器官に問題が生じ、そしてその結果、憂鬱症が惹き起こされる、というのはすぐれた医師の多くが同意するところである。アウイケンナ (3. 1. 4. 18) やアルナルドゥス (『診療概略』 1. 18) やジャッキーニ (『ラーゼス第九書簡注解』 15)、モンタルト (10) やル・ボワ (『憂鬱症について』) が考えるように、「この黒胆汁という体液は、体内のどこかが生まれつき、あるいは炎症後に不具合をきたす場合に生じる。また、そうでなければ、瘡など悪性の病に罹った後の血液に含まれている」。彼らのこの見解はガレノス (『患部について』 3. 6) とも一致している。グァイネリオは四日熱によって憂鬱症になった患者の例を挙げているし、ダ・モンテ (『診察』 32) が例として挙げる 28 歳の若い男性は、四日熱の後に憂鬱症になり、その後 5 年の長きにわたって苦しんだという。ヒルデスハイムの『拾遺集』 (2 「狂気について」) で語られるオランダ人貴族は、長期間、瘡に苦しんだ末、憂鬱症に激しく苦しめられる。ガレノス (『黒胆汁』 4) は疫病を憂鬱症の原因の一つに挙げ、ポッターロはその著『梅毒治療法』 (2) でフランス病たる梅毒を原因の一つとしている。また熱狂、癲癇、卒中を憂鬱症の原因とする者もいるが、それはこういった病がしばしばこの憂鬱症という病気に変化するからである。痔血や鼻血や経血の鬱滞——月経の停止については、処女のまま年老いた女性や、修道女や未亡人において、ある種の憂鬱症を惹き起こす唯一因としてより詳細に論じるに値するのだが、これについては、すでに別の個所で示したように、ロドリゴ・デ・カストロとメルカドが個別に論じているのでそちらを参照されたい——いかなる出血であれ、それを堰き止めることで憂鬱症が生じることについては、すでに述べた。ただ、ここで付記しておきたいのは、この種の病に起因する憂鬱症は、デュ・ローランによれば、他のものよりも不可避的な原因から生じるのであるから、憐れまれるべきであり、優しく同情の目で見られるべき対象である。

第5節第2項

原因としての特定部位の不調。

身体部位は不調をきたすと、ほぼすべてがこの病を惹き起こす。たとえば脳とその関連部位、心臓、肝臓、脾臓、胃、子宮、幽門、腹腔、腸間膜、下肋部、腸間膜静脈などなど、つまるところ、アルコラーニ曰く、「焼け焦げてしまいか、余分な養分を排出できなくなると、どんな部位でも憂鬱症を惹き起こす」。サヴォナローラ（『主要な医術』11.6.1）も同じく、憂鬱症は各部位で発生するとの見解であり、クラト（『診察』17.2）も同様である。秀でた医師ド・ゴルドン（『諸病の正しき治療法』2.19）も同じ見解である。「胃、肝臓、心臓、脳、脾臓、腹腔、下肋部にも憂鬱症の原因物質はある。というのも、黒胆汁は各部位にあるからであり、そうでなければ、肝臓から黒胆汁がうまく浄化されていないということである」。

脳が憂鬱症を惹き起こすことはよくあり、よく知られている。熱すぎたり、冷たすぎたりする場合、あるいはメルクリアーレが主張するように、「頭の内部であれ周辺であれ、血液が焦げ付くことにより」脳自体が不具合を起こして「憂鬱症を惹き起こす」。モンタルト（『憂鬱症論』11）は「熱い心臓と湿った脳をもつ」人がもっともこの病気になりやすいと、ハリアッバス、ラーゼス、アウイケンナを典拠に実証する。メルクリアーレ（『診察』11）は脳が冷えると憂鬱症を惹き起こすと言ひ、サルスティオ・サルヴィアーニ（『医学論集』2.1）によると、憂鬱症は「脳が冷えたり、乾燥したりして不具合を起こすと生じる」。またル・ボワ、ベネデッティ、ベネデット・ヴィットーリは、「脳が熱する不具合」からこの病気が起こると論じ、モンタルト（10）も脳の熱が血液を焦がすことで生じるとする。さらに、脳はそれだけで、あるいは他の部位との同調によって異常をきたす。前者は、すなわち、脳固有の性向による異常であり、後者は、ヴィットーリの言葉を借りると、「他の部位から上昇し、頭部に煙のごとく侵入し、その動物機能を変質させる蒸気」による異常である。

ヒルデスハイム（『拾遺集』2「狂気について」）は、この病気が「心臓の不具合、すなわち心臓が熱くなったり、冷たくなったりすること」で惹き起こされると考える。また熱い肝臓、冷たい胃も憂鬱症の原因として考えられることが多い。メルクリアーレ（『診察』11.6.86）は、熱い肝臓と冷たい胃がこの病気をよく惹き起こすと論じる。ショルツはクラト宛書簡で、下肋部憂鬱症が冷たい肝臓から生じることもあるとするモナウの見解を引用し、その問題を論じている。ただ、多くの論者は、原因は熱い肝臓にあるとの見解で一致している。「肝臓は体液の製作所であり、そこが熱くなったり、乾燥したりして異常をきたすと、とりわけ憂鬱症を惹き起こす」。「胃と腸間膜の静脈は閉塞するとしばしば連動し、それ故に、そこで生じる熱を逃がすことができず、多くの場合、その部分の質料が烈しく焦げ付き、炎症を起こし、下肋部憂鬱症になる」。グァイネリオ（2.15）は、腸間膜静脈だけでも十分に憂鬱症の原因となると論じる。脾臓が腸間膜静脈と

同調したり、痔血が鬱血することで、この病気につながり、またモンタルト（『診察』23）曰く、「冷たすぎたり、乾燥しすぎたりして脾臓が本来の機能である他の部位の瀉血を行わない」と憂鬱症になる。ダ・モンテは脾臓の機能停止を、この病気の大きな原因として数え挙げる。クリストバル・デ・ヴェガは、精巣や子宮で腐敗した血液が原因で生じた憂鬱症を見たことがあると、自分の知識を披露する。また、すでに紹介したように、アルコラーニは「経血と精子は、放出されない期間が長すぎると、腐敗し、焦げ付くことで、黒胆汁に変わる」との見解である。

ギリシア人が「プレーン」と呼ぶ横隔膜、つまり鳩尾付近の、胸腔と腹腔とを仕切る膜も、憂鬱症の原因となる。というのも、この部位が炎症を起こすと、痙攣と弛緩が起り、精神状態がひどく乱されるからである。これらの部位は、大部分、炎症が害をなし、体液と精気を腐敗させ、後天的に憂鬱症を惹き起こす。というのも、これらの部位から、煤けて黒い精気が生じるからである。そして、これを根拠とし、モンタルト（10章「憂鬱症の原因について」）は論じる。「憂鬱症の原因を、冷たく乾燥することと論じる人もいるが、より確実に憂鬱症につながるのは、熱く乾燥することであり、脳が熱くなったり、血液が焦げ付いたり、肝臓その他の内臓が過度に熱を帯びたり、幽門が炎症したりすることが原因となるのだ。またガレノスが言うように、香辛料、孤独、不眠、瘡、学究、瞑想など熱を生じるものによっても血液は乾燥し、なおさら憂鬱症の原因となる。それゆえ、後天的憂鬱症を惹き起こす異常は、冷たく乾燥することではなく、熱く乾燥することである」と結論づける。この点については、すでに「黒胆汁の質料」の項で十分に論じたが、このことは、狂気を生じる後天的憂鬱症には当てはまるが、（より冷たく過剰になって）軽い毫碌を生じる先天的憂鬱症には当てはまらない。これと同じ見解は、ゲラルドゥス・デ・ソロが、ラーゼス注釈の中で主張している。

第5節第3項

頭部憂鬱症の諸原因。

ここまでは憂鬱症の原因についての退屈な総論であったが、ここからは各論に転じ、三種の憂鬱症を個々に取り上げ、それぞれの種に特有の原因を簡潔に論じていく。これらの原因の中には、種類の区別に関係なく共通するものもある。異常をきたして抵抗力を失い、脆弱化した箇所と同じような害をもたらし、三種類すべての憂鬱症を惹き起こす。しかし、多くの原因は、各種にそれぞれ特有なものであり、他の種では減多にみられない。たとえば、頭部憂鬱症は、デュ・ローラン（『憂鬱症論』5）によると、脳が異常をきたして、冷えても起こるし、熱くなっても同様に生じるとされる。エルコレ・サッソーニアが主張するところによると、この憂鬱症は、動物精気の興奮、あるいは不具合によってのみ生じる。前述のサルスティオ・サルヴィアーニ（『医学講義』2.1）は、この憂鬱症が冷たさから生じると主張しているが、私自身は、冷たさから生じるのは、白痴や痴呆といった先天的憂鬱症だと考える。というのも、ガレノス（『脈拍原因論』4.8）

とアウイケンナが論じるように、冷たく湿った脳は、痴呆と分かちがたく結びついているからである。しかし、今ここで論じる後天性の頭部憂鬱症は、熱く乾燥する不具合によって惹き起こされるというのが、アラブ人サラピオン（3.22）他、多くの人々の見解である。アルトマルスとル・ポワは、この病気を先天的に体液が焦げる不具合とし、これにより血液と胆汁が黒胆汁に変わると論じる。しかし、これらの見解はどちらも成立するものであり、その理由は、ブルエレとカポディヴァッカが主張するように、「脳が熱くなれば、動物精気も熱くなり、そこから狂気が生じ、脳が冷たくなれば、痴呆が生じる」からである。ダーフィット・クルシウス（『ヘルメスとヒポクラテスによる病の劇場』2.6「黒胆汁について」）は、この憂鬱症を脳の炎症による病としつつも、「偶発的に熱いだけで、それ自体は冷たい」としているが、私自身はカポディヴァッカの見解と同じである。サルヴィアーニによると、この黒胆汁という体液は、脳そのものの内部に見られることもあれば、脳を覆う膜や被膜に含まれることもあり、脳室の通路や静脈の中に見られることもある。ラーゼスが記すように、この病気は「狂乱や瘡や長期間の病気の後、暑い場所や日射しのもとに長時間にいたり、頭を殴られたりした後に」よく起こる。ル・ポワはこれに加えて、孤独や不眠、脳の炎症の後や、香辛料を使いすぎたり、熱い飲み物や食べ物を口にすぎたりしても発症すると言う。ダ・モンテ（『診察』22）は、憂鬱症のユダヤ人の症例のところで、これらすべてを数え挙げ、ファン・ヒュールネ（12「狂気について」）も同様に繰り返す。グアイネリオは、熱い風呂、にんにく、玉葱、汚い空気、腐った空気、不眠などを原因として挙げ、精子を貯めすぎたり、出血を止めたり、横隔膜の病気になったりしても、発生すると言う。またトラレスのアレクサンドロス（1.16）によると、過度な心配、苦悩、悲痛、不満、学究、瞑想、つまり、六つの非自然的事柄がおかしくなると生じる。エルコレ・サッソーニア（1.16）は、腫物や出血を焼灼したり、乾燥したりすると発症すると論じる。デ・カステロ・ブランコ（『医学治療法』2.67）が例として挙げる男性は、腕に腫物ができてしまったのだが、その傷口が治ると狂ってしまい、その傷口が、また開くと、狂気は治まったという。トリンカヴェッラは、太陽のもとにすぎ、性行為に耽りすぎ、過度な運動をしすぎたためなどで憂鬱症になった患者の例を挙げ（『診察』1.13）、また、兜が日射しで熱くなりすぎたために頭部憂鬱症を発症した例も挙げている（同書3.49）。プロスペロ・カラーニは、枢機卿カエシウスを、長期間にわたる学究によって憂鬱症になる人たちの典型として挙げているが、その実例は枚挙に遑がない。

第5節第4項

下肋部憂鬱症、すなわち鼓腸性憂鬱症の諸原因。

これらの原因を繰り返すに際し、私は謂わば調理済みの食材を再び給仕するわけだが、ここでは、それらの諸原因を、憂鬱症の種類別に当てはめているので、すでに述べたことをもう一度言わざるをえないのである。下肋部憂鬱症、すなわち鼓腸性憂鬱症は、アラブ人が上腹部憂鬱症と呼ぶものであり、私の考えるところでは、もっとも激烈で、もっとも頻繁に起こるものである—

—ただし、ブルエレとデュ・ローランはこの憂鬱症をもっとも危険が少なく、発見もしやすく、治療も難しくないとしている。その原因には内的なものと外的なものがある。内的原因は、鳩尾、脾臓、胃、肝臓、幽門、子宮、横隔膜、腸間膜静脈など、さまざまな部位、さまざまな器官における分泌液や血液の鬱滞から生じる。モンタルト（15）はガレノスを典拠に、「腸間膜静脈が熱を帯びたり、滞ったりすることを直接因」とし、「これにより、肝臓への乳糜の通路が抑制されたり、堰き止められたり、腐敗したりし、腹鳴や鼓腸を生じる」と説明する。このことについては、ダ・モンテ（『診察』233）やトリンカヴェッラ（1. 1）やプラタ（『症例』1）がわかりやすく説明しており、プラタには、上述のように腸間膜静脈と腸が閉塞し、熱を生じたためにこの病気になった法学博士の例が挙がっている。曰く、「その理由は、腸間膜静脈が腹部と肝臓付近で熱を帯びているからである」。またいくつかの部位が同時に不具合をきたし、この病気を惹き起こすこともある。たとえば肝臓が熱くなり、胃と腹部が冷たくなる場合などなど、この症例については、ウーリエ、ヴィットリオ・トリンカヴェッラ（『診察』3. 35）、ヒルデスハイム（『拾遺集』2. 132）、ゾレナンデル（『診察』9「リヨン市民の場合」）、ダ・モンテ『診察』（229）の1549年ドイツのモンフォール伯爵、同じく『診察』（233）のフリジェメリカの例を参照されたい。ジュリオ・チェザレ・キオディーニは、ほぼすべての診察で、胃が冷たくなり、肝臓が熱くなりすぎることを原因とし、ある伯爵とポーランドの男爵の例（『診察』89, 106）を紹介し、それが原因で血液が熱を帯び、濃い蒸気が心臓と脳に送られると説明する。メルクリアーレ（『診察』86）は「不具合をきたした胃」を原因とする。というのもメルクリアーレによれば、胃は腹部の王様であり、胃が調子を崩すと、栄養が行きわたらず、あるいは悪質な養分が供給され、腹部の他の部分もおかしくなり、それが原因で、不消化、腸閉塞、鼓腸、腹鳴、腹痛などが生じるからである。エルコレ・サッソーニアは、肝臓が熱を帯びることだけでなく、肝臓の機能低下や閉塞も憂鬱症の原因になるとし、肝臓を憂鬱症の鉱床と呼ぶ。デュ・ローランも肝臓を原因として挙げ、熱を帯びすぎた肝臓は食べ物を未消化のまま胃を通過させ、体液を焦がすと説明する。ダ・モンテ（『診察』244）は肝臓の冷えも原因となりうることを証明する。デュ・ローラン（12）とトリンカヴェッラ（12「診察」）とヴァルター・ブルエレは、脾臓にこそ、最大の非があると考えているようである。脾臓は大きくなりすぎたり、小さくなりすぎたりすると、肝臓に血液を多く引き込みすぎ、上手く排出できず、肝臓を浄めるという然るべき機能を果たせなくなるのだ。ヒルデスハイムが注釈しつつ引用するペトルス・クニミアンダーは、この原因を「脾臓肥大」とし、憂鬱症の泉と呼ぶ。ディオクレスはこの種の憂鬱症は、心室下部の開口部が炎症することによって生じると考えていた。腸間膜や横隔膜の熱による不調、子宮の病気、痔血の停止など、これに類するものを多く原因として挙げるものもいるが、これらすべてをデュ・ローラン（12）は腸間膜、肝臓、脾臓の三つに還元し、これらをそれぞれ肝臓型、脾臓型、腸間膜型憂鬱症という名で呼んでいる。

外的原因は、悪しき食事、気苦勞、悲しみ、不満などであるが、要するにダ・モンテ（『診察』244）が自らの経験をもとに言うように、六つの非自然的事柄である。ゾレナンデル（『診察』9「リ

ヨン市民の場合)は読者に対し、未熟な医者が欲望を刺激するために患者に飲ませた催淫剤カンタリスが原因でこの病気になった人がいると示している。しかし、大抵の場合、恐怖と悲しみ、突然の動揺、心の乱れが原因となり、憂鬱症は、特に調子の良くない身体に生じる。メラニトロン(14.2「魂について」)は、悲痛、嫌悪、熱情、不満など激しい気持ちに襲われると、女性がよくヒステリーになるように、男性はしばしばこの病気になると論じる。カメラリウス執筆の伝記によると、メラニトロン自身も憂鬱症に苦しめられていたというから、ここは自らの経験に基づく持論であろう。ダ・モンテ(『診察』22「狂ったユダヤ人の場合」)もメラニトロンと同意見で、彼の患者の男性もまず心が悲しみに打ち拉がれて憂鬱症になったのだという。ロンドゥルも自分の経験について述べている。ある日、彼は、医療記録を書いてしまわねばと切に思っているところ、あるきっかけでその仕事の邪魔をされ、下肋骨憂鬱症の発作に襲われた。しかし、これを避けるために彼はニガヨモギの煎じ薬を飲み、そうすると治ったという。メラニトロンは、「この病気は頻繁に起こり、その症状も厄介なので、すべての人がその偶発因を知ることが必要かつ有益であり、知らないでいるのは危険であると考え」、それゆえ、すべての人に、その原因と症状と治療法をある程度は理解してもらいたいと思っていた。

第5節第5項 全身体憂鬱症の諸原因

これまでと同様、この種類の憂鬱症にも、内的原因と外的原因とがある。内的原因は、「肝臓が黒胆汁を生成しやすい傾向にある場合や、生まれつき脾臓が弱く、その機能を果たせない場合である」。高濃度の黒胆汁、痔血や経血や鼻血の鬱滞、病気の長期化、瘡、六つの非自然的事柄は、この病気を悪化させる。しかし、特に悪いのは、ル・ポワが考えるように、豆類、塩肉、貝類、チーズ、黒ワインなど悪しき食習慣であり、メルクリアーレはアウェロエスとアウィケンナを典拠に、すべての植物、ガレノス(『患部について』3.7)は特にキャベツがよくないとする。恐怖、悲しみ、不満等も同じく悪いのだが、これらについてもすでに述べた通りである。かくして、簡単ではあるが、これで憂鬱症全般に関する原因と、個々の種類に特異な原因とを概観したことになる。

今現在、幸せな状態にあり、すぐれた体液、健康な身体を威張り、他人を軽蔑し、勝ち誇り、自慢する人であったとしても、その状態は極めて脆いものに過ぎず、すぐにでも落ちぶれてしまうものだ。しかもその落胆のきっかけはいくつもあり、食べ物が悪かったり、空気が悪かったり、ちょっとした損失、些細な悲しみや不満、あるいは瘡にかかったりするだけで、病んで破滅してしまう。突然の出来事に襲われることも多く、人生において幸せでいられる時間などわずかにすぎない。人間とは、なんと脆弱で、なんと愚かな生き物であろうか。「これゆえ、神の全能たる御手のもとに、己を卑くせよ」(『ペテロの前の書』5.6)。自分自身を知り、自分の現在の惨めな状態を認め、それを正しく生きねばならない。「立つ者は落ちぬよう心せよ」。今現在は榮え、魂

も身体も運命も善きものを持ち合わせていても、「その日の晩遅く、何が起こるかはわからず」、嵐に見舞われるかもしれない。それゆえ、幸運で富めるときは、油断せず、「酔いしれることなく、注意し、恭しく運命を享受せよ」。貧乏で病めるときは、節度を守って生きよ。以上。

第3章第1節第1項

身体における憂鬱症の症状、あるいは兆候

アテナイの画家パルシオスは、フィリッポス2世がマケドニアに連行したオリュントス人捕虜の中から、高齢の老人をひとり奴隷として購入し、その老人をアテナイへと連れ帰り、拷問にかけて激しく責め立てたのであるが、それはその姿を見ることで、その時に彼が描こうとしていたプロメテウスの苦痛と激情とを、よりよく表現するためだったと言われている。ただ私の場合、この章の目的のために、哀れな憂鬱症患者をいたぶってまで、真に迫るべく、野蛮で、非人道的で、残忍な行為に及ぶ必要はない。というのも、憂鬱症の症状はわかりやすく、明確で、よく知られたものであり、あらためて綿密に観察する必要もなければ、わざわざ遠くから研究対象を連れてくる必要もない。憂鬱症患者は自分自身でその絵を描き、自ら進んで秘密を暴露する。彼らはあらゆる場所にいるので、出かけていけば、必ず出くわす。また彼らはその病気を隠すことができず、その苦しみは知られ過ぎるほどに知られているので、その症状を描写するのに、わざわざ遠くまで探しに行くには及ばないのである。

症状には普遍的なもの、患者一人一人、あるいは憂鬱症の種類によって異なる個別的なものがある。ド・ゴールドン（『諸病の正しき治療法』2.19）曰く、「兆候の中には隠れたものもあれば、明白なものもあり、身体的なものもあれば、精神的なものもある」。またカポディワッカ曰く、「その症状は、内的原因か外的原因かに応じて、さまざまに変化する」。ジョヴァンニ・ポンターノ（『天の事物』10.13）によると、生誕星と天の影響に応じて、フィチーノ（『研究者の健康維持』1.4）によると、体液のさまざまな混合に応じて変化する。体液の温度（熱／冷）、性質（生得／後天）、濃度（濃／淡）に応じて変化する。アエティウスは「憂鬱症的狂気の兆候に多様性」があることを認めている。デュ・ローランは、患者の気質、躁鬱、性質、性向によって、あるいは病気の持続時間、他の病気との複合か否かによっても兆候が変化するとしており、原因が多様であれば、兆候も多様であるのは必然であり、その数はほとんど無限である（アルトマルス『医術』7）。ワインは飲む者にさまざまな作用を惹き起こす。デュ・ローランが紹介するトルトコツラという薬草を口にすると人は「笑ったり、泣いたり、眠ったり、踊ったり、歌ったり、吠えたり、酔っぱらったり」などなどさまざまな症状を見せる。これと同じように、我々の論じるこの黒胆汁という体液は、人それぞれ、さまざまな兆候を生じる。

しかし、範囲を一般的なものに限定すれば、これらの兆候は、身体的なもの、精神的なもの

とに分けることができる。憂鬱症患者に通例見られる身体的兆候は、以下の通りである。体液が多かれ少なかれ焦げ付くので、身体が冷たく乾燥するか、熱く乾燥する。これらの初期兆候から、いくつもの二次的兆候が生じるのであり、例えば身体の色が、黒くなったり、黒ずんだり、あるいは青白くなったり、赤みがかったりし、モンタルト (16) がガレノス (3巻『患部について』) を典拠に述べるように、「真っ赤に」なる人もいる。ヒポクラテスは「狂気と憂鬱症について」で、これらの兆候を数え挙げている。曰く、彼らは「痩せ衰え、萎び、虚ろな目をして、肌は荒れ、皺々になり、老けて見える。多くの人が鼓腸で悩み苦しみ、腸に激しい痛みを覚え、よく嘔気をする。あるいは腸が乾燥して固くなる場合もある。表情に覇気がなく、顎鬚も垂れ下がる。耳鳴りがし、眩暈に悩まされている。まったく眠ることができず、眠れたとしても、その眠りは切れ切れで、その間に、ひどく恐ろしい夢にうなされる」。「妹アンナよ、眠れぬ私を苦しめるこの夢は何なの」。ここに挙げた兆候はガレノス、ルフス、アエティウスを典拠とする憂鬱症論の中でメラネリウスが、またラーゼス、ド・ゴルドン、現代の医者たちが同様に繰り返しており、「彼らは強烈で腐臭を放つ嘔気が止まらず、あたかも胃の中の食べ物が腐ったか、魚を食べたかのようである。腸は乾燥し、眠りは中断され、見る夢は馬鹿げている。非現実的な幻想を何度も目にし、眩暈を起こしがちで、よく震えていて、情欲に耽りやすい」。一般的症状として、これに心臓の動悸と、冷や汗を付け加える人もいて、デュ・ローランが言うように、「**身体**の多くの部位が引き攣り」、蚤に刺されたときのような一種の皮膚の痒みが、症状として見られることもある。モンタルト(21) は目がこぼぼって瞬きしないこと、逆に瞬きしすぎることを兆候として指摘、これについてはアウイケンナも同様で、「**目が定まらず、吃音がちで、真っ赤な顔をしている**」(3. 1. 4. 18) と述べ、ヒポクラテスの『箴言』を典拠に、彼らはたいてい吃る、とも付言する。ラーゼスは「頭痛と強い倦怠感と」を主たる兆候とみなし、「吃音や舌のもつれなどに加えて、強度の引き攣り、虚ろな目、血管の劣化、唇の肥厚」を付け加える。また、病の進行が進むと、人まねをしたり、声をあげて笑ったり、にやりとしたり、あざ笑ったりする姿がよく見られ、気持ち悪い顔つきをして、はっきりと聞き取れない声でぶつぶつ独り言を言ったり、奇声を上げたりする。そして普通、痩せこけていて、毛深く、表情に元気がなく、萎びていて、見て気持ちのいいものではないが、それは、彼らが絶えず恐怖し、悲しみ、混乱しているからで、気怠く、身体も重く、怠惰で、落ち着かず、出歩く気にもなれないでいる。しかし、記憶力は大概の場合しっかりしており、知力も理解力もすぐれている。彼らの脳は熱く乾燥するので、そのために眠ることができず、「その寝不足は強烈で頻繁」(アレティウス)、その期間は1か月から1年に及ぶこともある。エルコレ・サツソーニアは、自分の母親がまる7か月間も眠らなかつたことがあると言い張っていた、と述べているが、本当であろう。トリンカヴェツラ (2. 16) は50日間起き続けていた人について言及しているし、シェンキウスは2年間眠らなかつた人の例をいくつか挙げているが、どの場合も生活に支障はなかつたという。生まれつき、彼らの食欲は、消化能力を上廻り、ラーゼスが言うように、「多くを欲し、わずかししか消化しない」。またアレティウス曰く、彼らは「たくさん食べるにもかかわらず、痩せ萎び、不健康で、強張り、便秘」、消化不良、閉塞、

唾液過多、嘔気などに「激しく苦しむ」。脈拍は希薄で遅い——頸動脈の場合は別で、ここの脈拍は非常に強い。しかし、シュトルースが『脈拍論』(4. 13) で詳細に示すように、彼らの脈拍は感情の高まりや乱れに応じて変化する。実のところ、憂鬱症のような慢性病の場合、脈拍はあまり重視されるべきではなく、クラトが指摘するように、脈拍に関しては迷信が多く、ガレノスにも実にさまざまな記述があって、最終的には、人の脈拍からは何も見て取れず、何もわからないと言っている。

彼らの尿は大抵の場合、色が薄く、「量が少なく、刺激臭がきつく、胆汁に満ちている」(アレティウス)とされるが、私見では、これも脈拍同様まったく当てにならず、さまざまな習慣やきっかけに応じ、一人一人異なるので、慢性病の場合には重視すべきではない。「黒胆汁の排出も、脾臓の働きに応じて、多い人もいれば、少ない人もいるが」、これが原因で鼓腸、心臓の動悸、息切れ、胃の湿り気の増大、心臓のだるさと痛みが生じ、精気が耐えられないほどに愚鈍となることがある。彼らの大便是硬く、量が少なく、真っ黒な場合もある。心臓、脳、肝臓、脾臓の不調の場合、大抵そこから不具合が生じ、悪夢、卒中、癲癇、眩暈、不眠症(と恐ろしい夢)などの病気を伴い、時ならぬ時に笑ったり、涙したり、ため息をついたり、泣きじゃくったり、赤面したり、震えたり、発汗したり、卒倒したりする。彼らの感覚はすべておかしくなり、実際には存在しないものを見たり、触れたり、その音を聞いたり、その匂いを嗅いだりしたと思ひ込む——この点に関してはのちの議論で詳しく見ていく。

第1節第2項

精神における症状と兆候

アルコールニ(『ラーゼス医学大全』9. 16)によると、こういった症状は無数に存在するが、事実その通りで、症状は患者によってさまざまであり、デュ・ローラン曰く「千人の人がおかしくなるとしても、同じようにおかしくなる人は一人もいない」(16)。とは言っても、より重要な症状についてはいくつか指摘しておきたいと思う。とりわけ、恐怖と悲しみとは、しばしば憂鬱症の原因となるが、長く続くような場合は、憂鬱症のもっとも明白な兆候、それとは切り離せない感情、特徴とも言える(ヒポクラテスとガレノスの『箴言』)。モンタルト(21)は急性憂鬱症と慢性憂鬱症について語り、恐怖と悲しみの症状はどちらにも共通すると述べているが、この点については、前述のヒポクラテスとガレノス、さらにアウイケンナと当代のすべての医者が同意見である。しかし、獲物の鳴き声と勘違いして走り出し、それでいてその間違いに気づかない猟犬と同じ過ちを、彼らは犯している。というのも、かつてはガレノスの論敵であったディオクレス、最近であればルイス・メルカド(1. 17「憂鬱症について」)やエルコレ・サッソーニアが正しく指摘するように、このヒポクラテスの箴言には、当てはまらない場合があるからである。つまり、ヒポクラテスの箴言はいつも正しいとは限らず、恐怖と悲しみとがあらゆる憂鬱症患者に共通す

る症状ではないということは、広く理解されるべきである。エルコレ・サツソーニアは、「より深く考察してみることで、これが正しくないことに気づいた。実際、悲しんでいても、怯えていない人があるし、怯えてはいるが、悲しんでいない人もいて、さらには、怯えても悲しんでもいない人もいる。もちろん、怯えていて悲しんでいる人もいるが」。サツソーニアは四種の狂人を例外とする。まずはカッサンドラ、マントー、ニコストラタ、モプソス、プロテウス、シビラのような憑依予言者。アリストテレスが指摘するように、彼女らは重度の憂鬱症ではあるのだが、「黒胆汁によって興奮状態」にあったのであり、バティスタ・デッラ・ボルタ（『人間観相学』1.8）もこの見解を支持している。次に、悪魔憑き、さらに、耳慣れない言語を話す類の人、最後に、いつも哄笑し、自分たちを王族か枢機卿だと思込んでいる類の詩人も例外とされる。彼らは元気で、大抵の場合が陽気であり、その状態が続く。バティスタ・デッラ・ボルタは恐怖と悲しみの兆候が見られるのは冷たい種類の憂鬱症患者だけであるとし、恋する人、シビラ、狂信者にはまったく見られないと論じる。こうなると結論とすべき見解は次のようになるだろう。憂鬱症患者はいつも悲しそうに怯えている、というわけではないが、大抵の場合がそうであり、理由もなく「恐れるに足らぬくだらぬものに怯え」（ド・ゴルドン）、「怯え方はさまざまだが、みな一様に怯え」（アルトマーレ）、「凄まじい激しさで怯える者もいる」（アレティウス）。「多くの人は死を恐れ、それと矛盾するのだが、自殺する人も多い」（ガレノス 3巻『患部について』7）。天が頭上に落ちてくると怯える人もいるし、自分が地獄に落ちている、あるいは落とされると怯える人もいる。「彼らは良心の呵責に苛まれ、神の恩寵を信じず、自分が地獄行きで、悪魔の手に落ちることは確実だと思い、大いに嘆く」（ヤーソン・ファン・デ・フェルデ）。悪魔や死に怯え、かくかくしかじかの病気に罹ってしまうのではないかと恐れ、何を見てもすぐに震え、自分はすぐさま死んでしまうのではないかと、あるいは、親しい友人や近しい仲間が死んでしまうのではないかと恐れている。危険や損失や不名誉なことが差し迫っているのではないかと怯える人もいるし、自分がすべてガラスでできており、それゆえ誰も近づくことはできないと考える人、自分の身体がすべてコルクでできていて、羽毛よりも軽い、あるいは、逆に鉛のように重いと思込む人もいる。肩から自分の頭が落ちてしまうのではないかと、自分のお腹の中には蛙がいるのではないかと恐れたりする人もいる。ダ・モンテ（『診察』23）は「気を失って死んでしまうのではないかと恐れ、一人では家から一歩たりとも出ない」人、「自分が会おう人はみな襲いかかってきて、喧嘩をふっかけ、自分を殺すのではないかと恐れている」人の例を紹介。三人目の例もまた一人では外出しようとししない人なのだが、その人は、悪魔や強盗に出会ったり、病気になることを恐れていたのだという。老婆は全員魔女だと考え、黒犬や黒猫はみな悪魔だと疑い、自分に近づいてくる人や生き物はすべて魔法をかけられ、自分を傷つけ、自分の破滅を望んでいると思込んでいた。四人目の例は、橋を渡ったり、池や岩や険しい丘に近づいたり、梁のある部屋で横になったりするのを嫌ったというが、それは、首を吊りたくなったり、入水自殺したくなったり、丘から飛び降りたくなったりするのを恐れていたからだという。教会での説教など静かな聴衆の中になると、無意識に、何か下品で、その場には相応しくないことを口にしてしまうのではないかと

恐れる。密室に閉じ込められると、空気が不足して窒息死してしまうのではないかと怯え、つねにビスケットとウイスキーなど気付け薬を携帯しているが、それは失神の発作が起こったり、気分が悪くなったりするのを恐れてである。教会や町の群集の中にいると、そこから出られなくなるかもしれないので、たとえ快適な場所であったとしても、おかしくなってしまう。気前よく約束をしたり、仕事を事前に引き受けたりするが、いざそのときになると、何もしようとせず、ありもしない無数の危険や災害などを思い描いて怯える。ラーゼス（『大全』）によると、「火刑に処せられると怯える者、大地が沈没してしまうのではないか、あるいは生きてまま地中に呑み込まれてしまうのではないかと恐れる者、犯してもいない罪で、国王に召喚され、間違いなく処刑されると思い込んでいる」人もいる。彼らは、このように死の恐怖に苦しむわけだが、その怯え方は「実際に殺人を犯した者」と同じくらい激しく、同じように精神を苛まれ、「理由もないのに、あたかも、すぐさま処刑に付されるのではないかと鬱々とする」（プラタ 3「心の疎外」）。彼らは損失や危険を恐れ、理由もわからず、自分は命、財産、所有するものすべてをきつと失ってしまうと思込んでいる。トリンカヴェッラ（『診察』 1. 13）の紹介する患者は、絞首刑になることを恐れ、逃げなければならないと言っていたが、何度言っても聞かせても無駄で、人殺しを犯したという妄想に三年も取り憑かれたままであった。このように理由もなく処刑されるのではないかと怯える患者の例は、プラタ（『症例』 1）にも二つ挙がっている。強盗や窃盗などの被害が報告されている場所に彼らがやって来ると、すぐさま、自分が疑われているのではないかと怯え、理由もわからず出頭することが多々ある。フランス国王ルイ 11 世は、自分に近づく人間はすべて裏切り者だと疑い、いかなる役人も信用しようとしなかった。「あらゆる人を恐れる者もいれば、特定の人を恐れる者もいて、彼らは人と一緒にいることが耐えられず、それだけで病気になる、あるいは家を出ただけで病気になる」（フラカストロ『思惟について』 2 卷）。どんな場合もつねに裏切りを疑う人もいれば、「親友や側近を恐れる」人もいる（ガレノス、ルフス、アエティウスを典拠とするメラネリウス）。彼らは鬼や悪魔を恐れて、暗闇では決して一人になろうとしない。耳にするもの、目にするものすべてが悪魔、あるいは悪魔憑きである思う。夥しい数の怪物や光景が頭に浮かぶのだが、彼らはそれを実際に目にしていると思込み、あるいはお化けのようなものも見え、悪魔や幽霊や鬼などと言葉を交わす。

どんなそよ風にも怯え、どんな物音にも驚く。

また恥ずかしさ、疑い深さ、小心さから、外を出歩こうとしない者もいて、「暗闇を命のように愛し、光に耐えられず」、明るい場所に出ることができない。帽子をいつも目深にかぶっているの、誰とも目を合わせることなく、好意を抱く人がいても目が合うこともない（ヒポクラテス『狂気と憂鬱症』）。彼らは虐げられたり、侮辱されたり、あるいは、しぐさや言葉遣いが変になって失敗したり、病気になったりしてしまうことを恐れて、人と一緒になろうとしない。自分のことを誰もかれもが観察し、指さして、馬鹿にし、悪意を抱いていると思っているからである。多

くの場合、「彼らは、自分が魔術にかけられたり、悪魔に取り憑かれたり、敵によって毒殺されたりすることを恐れており、もっとも近い友人を疑うこともある。あるいは自分の内部に言葉を発し、語りかけてくる何ものかがいて、嘔気をするとその毒が出てくるとも思っている」。クリストバル・デ・ヴェガ (2. 1) の患者は、このような症状に苦しめられていたが、どんなに説得しても、どのような処置を施しても、恢復することはなかったという。また他人が苦しめられている恐ろしい病気について、それを目にしたり、耳にしたり、本で読んだりしただけで、自分自身もその病気に罹ってしまうのではないかと恐れる者もいる。それゆえ、彼らは——これは憂鬱症に限ったことではないが——病気に関する話題には耳を貸そうともしないし、そういった主題の本を読もうともしない。自分が聞いたり、読んだりしたことを、自分に当てはめてみることで、その病気を悪化させ、増大させてしまうのではないかと恐れているのである。悪魔に憑かれた人、魔術をかけられた人、癲癇で発作を起こす人、麻痺して震える人、眩暈を起こす人、危険な場所に立っている人、よろめく人を目にすると、何日もの間、その映像が彼らの頭に焼き付き、自分も同じような目に会うのではないかと恐れてしまい、『良心問題例解』(12. 12) でパーキンズがいみじくも指摘するように、実際、同じような危険にさらされる。そして多くの場合、その危険は彼ら自身が、激しい想像の力によって生み出すものである。たとえば怪物や処刑された人、屍体など、恐ろしいものを見るのに耐えられず、悪魔の名が口にされるのや、他人が悲惨な話をすることを耳にすることさえ嫌でたまらず、もしそんなことになろうものなら、恐怖で震え、「魔女ヘカテの夢を見ている気がし」(ルキアノス)、その恐怖を長い間、頭から拭い去ることができない。そして、すでに述べたように、自分が聞いたり、見たり、読んだりしたものをすべて自分に当てはめてしまう。フェリックス・プラタが注記するように、若い医者の中には、病気の治療法を研究していて、自分自身その病気に罹ってしまう者、患者を診て気付いた症状を、すべて自分自身に当てはめてしまう人がいる。それゆえ——これは、読者の吐き気を誘ってでも、繰り返して忠告したい。たとえ冗長になろうとも、一つの言葉を一度だけ言うよりも、むしろ十の言葉を十回繰り返したい——今現在憂鬱症に罹っている人には、この症状論を読まないようにしていただきたい。これを読むことで心が乱れ、症状が悪化し、これまで以上に憂鬱症の激しさが増してしまうかもしれないからである。今までの総括をすると、アレティウスが言うように、理由もなく「彼らはずっと、何でもないことについて嘆き、怯える」。そして、つねに自分の憂鬱症が最悪であり、自分よりもひどい症状の人はいないと考えているのだが、実はたいしたことはない。いかなる人であれ、この種の病気の患者も御多聞に洩れず、自分の症状がどれほどなのか決してわかるものではない。彼らは、後々になれば自分自身可笑しくて笑い出してしまうような、つまらない、些細なことで、実際に苦しみ、心乱れる。しかも、その苦しみは深く、まるで、そういった些細なことが、本当に重要で本質的なことであり、恐れるに値するものだと思い込んでいて、どんなに言って聞かせてもそれが虚妄であることを納得しようとしな。そして、ある恐怖が静まったとしても、すぐさま、また別の恐怖に悩まされる。いつも何かに怯えているが、それは過去一度たりとも存在したことはなく、現在にもあり得ないし、未来にも決して起こり得ないこと

であり、自分で愚かにも想像し、思いついたことにすぎない。どんなに些細なことにも、心乱され、平静を失い、つねに、不平を言い、嘆き、苦しみ、疑い、満たされず、不満を言い、憂鬱症が続く限り、この苦しみから解放されることはない。あるいは、彼らの心が一時的に比較的穏やかで、上記のような外的な恐怖や、他所での出来事には囚われない場合でも、彼らの身体は変調をきたしており、それゆえ、どこかしら具合が悪いのではないかと疑い、頭が痛いとか、心臓や胃や脾臓などの調子がおかしいなどと言っているものだから、実際にその類の病気になってしまう。彼らはずねに、心か身体、あるいは心身ともに悩みを抱えているのであり、妄想、譫妄に苦しみ、心身ともに異常をきたすことで、苦しみがやむことがない。しかしながら、こういった症状が出るにもかかわらず、ジャッキーニが指摘するように、「彼らは、他の面では、賢明沈着で、分別があり、自分の品位、人格、地位にそぐわないことは一切しないのであり、この愚かで馬鹿げた子供じみた恐怖だけが例外なのである」。しかし、この恐怖が彼らの魂を、激しく、しかも持続的に苛み、苦しめる。滅多に咬まない犬はいつも吠え立てるのであるが、この恐怖はそれと同じように、つねに憂鬱症患者を苦しめ、その恐怖は、憂鬱症が続くかぎり、避けることはできない。

もう一つの特徴的の症状は悲しみであり、悲しみは憂鬱症と別れることのできぬ伴侶、忠実なる友アカテスであり、両者はコスマスとダミアヌスの如く一蓮托生である。すべての著述家が一致するように、悲しみは頻繁に見られる持続的の症状ではあるが、原因はいつも明白ではない。「人はみな嘆き悲しむが、悲しみの理由を尋ねられても、答えることはできない」。彼らは決して笑わず、塞ぎ込んで、物思いに耽っており、あたかもトロポニウスの巢窟から出てきたばかりといった面持ちである。また（発作によって）大笑いし、異常なほど陽気に見える場合も多くあるが、すぐさま、極端に悄気込み、気怠く、重苦しくなる。陽気と陰気とが同時に両立しているが、大抵の場合は陰気で悲しげである。「嬉しいことがすぐ立ち去るのに対し、嫌なことはしがみついて残る」。悲しみは、つねに持続して憂鬱症患者にしがみつきの、禿鷹がティテュオスの内臓を啄むように蝕むので、決して逃れることができない。彼らは決まって恐ろしく心悩ます夢を見るが、目を覚ますやいなや、重い心が、ため息を漏らし始める。つねにやきもきし、ため息をつき、嘆き、不平をかこち、あら捜しをし、愚痴をこぼし、不満を垂れ、涙する。所謂「自虐者」であり、自分自身を苦しめ、心穏やかならず、不安な考えや、自分自身に対する不満、あるいは、自分とは関係のない他人や社会の事柄に対する不満を抱いては、心乱されている。過ぎ去ったこと、今現在のこと、これからのことなど、さまざまなことに思いを巡らせる。不名誉や損失、侮辱や虐待の記憶など、今ではとるに足らないことのはずなのに、あたかも新たに経験したかのように苦しむ。また逆に、まだ起きてもないのに、これから起きるに違いないと疑って信じ込み、危険や損失や貧困、恥辱や悲惨に思いを馳せて苦しむ。彼らの頭上では、狂気をもたらす女神アーテーが顔をしかめているのであり、彼らの苦しきは、アレティウスが「魂の苦悩」、永劫なる苦悩と呼ぶほど激しい。彼らを喜ばせ慰めることなどほとんど不可能である。確かに、彼らこそがもっ

とも幸せなのだと思える人もいる。しかし、彼らがどこへ行こうと、留まろうと、走り出そうと、馬に乗ろうと、

——騎手の背後には、黒い不安が同乗している。

彼らはこの恐ろしい疫病から逃れられないのである。たとえどんな仲間と一緒にいようとも、「その脇腹には致死の矢が刺さっている」。矢に刺された鹿が、どこに行こうと逃げようと、たとえ仲間の群れと一緒に居ようとも、痛みに苦しめられるのと同様に、この悲しみはなくなる。また、躊躇、斑気、虚栄、恐怖、苦悩、心配、嫉妬、猜疑などもなくなり、安心することができない。テレンティウス『自虐者』のメネデムスは次のように嘆く。

悲しみに暮れて家に戻っても、魂は激しく
乱れ、悲しみはやまなかった。腰を下ろすと
召使たちが駆け寄り、靴を脱がせてくれたし、
他にも慌ただしく動く者、寝床を用意する者、
料理支度をする者もいて、誰もが忙しくしていた。
皆が私のこの悲しみを和らげようとしていたのだ。

このように、召使たちは主人を喜ばせようと、できる限りの努力するのであるが、彼は深く塞ぎ込んだままである。メネデムスは息子が死んだという知らせを受け取っていて、「それが彼を苦しめていた」。それこそが「心痛」、苦痛、苦悩であり、取り除くことはできないのであった。ここから先に進むと、多くの場合、彼らは人生に倦み、自殺したいなどという禍々しい考えが頭に去来するようになるのであり、よって、人生の倦怠感も、普通に起こる症状である。「時の流れは遅く、喜びをもたらすことはない」。彼らは何事にもすぐに飽き、ぐずぐずしているかと思うと、急にいなくなり、寝床で目覚め、起き出したかと思うと、床に逆戻り、喜んでいるかと思うと、次の瞬間にはまた不機嫌になっている。今は好きだと言っている、次第にすべてが嫌になり、うんざりしてしまう。アウレリアーヌス曰く、「生きたいと欲したかと思うと、死にたいと欲する」(1.6) のだが、大抵の場合は、「人生を呪い」、満たされず、安らげず、些細なこと、とるに足らぬことに心乱されており、自殺したいという誘惑にかられることも多い。「彼らは生きたいと願わず、さりとて死ぬこともできぬ」。文句を言い、涙を流して嘆き、自分ほど悲惨な生活を送る者、自分ほどついでない者は未だかつていなかったと思う。ゆえに、貧乏人を目にしても、自分と比べると裕福だと思い、乞食が戸口にやってきても、自分よりも幸せだと嘆き、喜んで成り変わりたいと願う。こういった傾向は特に、いつもの仲間と離れ、一人で何もしていないとき、辛く、不快で、いらいらしていると強くなる。悲哀、恐怖、苦悩、不満、倦怠、怠惰、猜疑といった感情が彼らに襲いかかって離さない。しかし、テオドロス・プリスキアヌス (2.5)

が指摘するように、彼らは自分の好きな仲間と再び一緒になり、気分がよくなると次第に、「自分のかつての批判的態度を呪い、人生の慰みに喜びを見出す」。こういった状態はしばらく続くのだが、新たな不満が生じると、またしても辛くなり、そうなるとう人生に倦み、すべてが嫌になり、生きたいというより、やむなく生きているという感じになってしまう。スエトニスの記述によると、皇帝クラウディウスには、この病の気があったようだ。この皇帝は腹痛に見舞われるだけで、自殺したいと考えるような人物だったという。ジュリオ・チェーザレ・キオディーニが『診察』(84)で言及するポーランド人患者は、この病気に罹り、恐怖と悲しみでつねに心乱されていて、自分の人生を厭い、いついかなる時も死を願い、惨めな状態から解放されたいと考えていたという。メルクリアーレも、長年にわたって、四六時中自殺のことばかりを考え続ける患者の例をいくつも挙げている。

猜疑と嫉妬もまた一般的症状である。憂鬱症患者は共通して、疑い深く、臆病で、何であれ勘違いしたり、大げさに捉えたりする傾向にあり、すぐに怒り出し、短気で、拗ねやすく、気難しい。親友たちと一緒にいても、理由もなく、ちょっとしたことですぐに声を上げ、ふっかけられたにしろ、そうでないにしろ、自分に対する攻撃だと受け取る。たとえ冗談で言われたことでも、大真面目に受け取ってしまう。また挨拶されなかったり、招待されなかったり、相談されなかったり、話し合いに呼ばれなかったり、あるいは、しかるべき敬意やちょっとしたお世辞や儀礼が抜けたりするだけで、自分が蔑ろにされ、軽蔑されていると思い、しばらくの間、そのことに思い悩む。人が会話したり、囁いたり、冗談を言ったりしているのを見ると、実際は、一般の話をしているだけなのに、彼らはすぐさま、「すべて自分について言われていると考えてしまう」。また会話に参加すると、相手の言うことをすべて取り違え、最悪の方向に解釈してしまいがちである。人からじっと見つめられたり、つねに話しかけられたり、笑われたり、冗談を言われたり、馴れなれしくされたり、言いよどまれたり、指さされたり、咳払いされたり、唾を吐かれたり、時には、物音をたてられたりするだけで耐えられない。彼らの頭の中では、みんなが自分のことを笑い、指さし、馬鹿にし、陥れ、軽蔑しているのである。誰もが自分のことを見ていると思い、恐怖と怒りとで、真っ青になったり、真っ赤になったり、あるいは、汗が噴き出したりする。しかも、この誤った思い込みに囚われてしまうので、その後、長きにわたって苦しめられることになる。ダ・モンテが『診察』(22)で例挙するユダヤ人憂鬱症患者は、「アドリア海よりも荒れやすく」、短気で、疑い深く、「怒りっぱかった」ので、彼とどう付き合ったらいいのか、誰もわからなかったという。

あらゆる行動において、彼らは落ち着かず、不安定で、気まぐれであり、どんなことであれ、容易に決断を下せない。するにしても、しないにしても、ほんの些細なきっかけや一言で、気持ちが揺らぐ。それでいて一度決意すると、頑として人の意見を聞かなくなる。彼らは何かを厭い、忌み、嫌い、一旦そう決めてしまうと、いかなる忠告、いかなる説得にも動じない。考えを変え

た方が、ずっと彼らのためになるのが明らかな場合であっても。しかし、大抵の場合、彼らは優柔不断でためらいがち、決めるのが怖くてしっかり考えることができず、「何かをすれば、した途端にひどく後悔。守銭奴かと思えば、次の瞬間、放蕩三昧」(アレティウス)。してもしなくても、あってもなくても、当たっても当たらなくても、彼らは苦しむ。四方八方に心乱れ、すぐに疲れ、それでいてつねに変化を求め、落ち着かず、要は、気まぐれで、心定まらず、一つの場所に長く留まることがない。

ローマにいと田舎暮らしを欲し、田舎にいと
遠きローマを天にまで崇め奉る——

同じ人と長く一緒にいることがなく、どんなことをしても、長続きしない。

王の赤子のように、細かくしてもらって食べたがり、それでいて
乳母に抱っこされ子守唄で寝かしつけられると、怒って嫌がる。

ご機嫌かと思っていたら、まるで蚤に噛まれたかのように、突然不機嫌になり、眠れずに寝床で何度も寝返りを打つ人のように、彼らの落ち着かない心は、揺らぎ変化する。本を一冊読み通したり、遊びを最後まで続けたり、1マイル歩いたり、1時間じっと座っていたりする忍耐力が彼らにはない。気分が高揚したかと思えば、次の瞬間には意気消沈、何かに取りかかる気になっても、ちょっとした言葉でやる気をなくしてしまう。

彼らは極端に情熱的で「欲するものは何であれ、激しく欲する」。切実で、心配性で、疑い深く、臆病で、嫉妬深く、意地悪でもあり、気前がいいときもあれば、けちな時もあるのだが、大抵の場合は強欲で、満たされることなく、いつも不平不満を垂れ、気難しく、「不正に対しては頑なで」、復讐に走りがちである。すぐに気分を害し、何より想像力逞しい被害妄想癖、話をしていても好感もてず、卑しいお世辞をよく言い、不機嫌で退屈で、真面目で厳格な性格をしている。いつも深く物思いに耽り、アルブレヒト・デューラーの描く「憂鬱」のように、服装に気をつかわず、肩肘をついて、じっと目を据えて考え込む真面目な女を思い浮かべるとわかりやすい。それゆえ、愚民アプデラー人がデモクラトスを評したように、彼らは高慢とか、柔和とか、愚かとか、半狂乱とか評されることもある。しかし、実のところ、彼らの考察は深く、理解力もすぐれ、思慮分別があり、賢明で、頭脳明晰である。この点で、私はハワード卿と意見を同じくする。「黒胆汁は、ほかのいかなる体液よりも、人間の考えを推し進め」、どんなに強力な飲み物やワインよりも、瞑想を深めてくれる。フラカストロが『思惟について』(2)で言うように、確かに彼らは「心乱れ、正しく判断することはできない」場合もあるが、甚深な判断力を発揮することもある。ただ、アルコールニが『ラーゼス第九書簡注解』(16)で指摘するように、彼らの「判断は、数夥しく、

滅茶苦茶で、壊れている。誠意を不誠実ととらえ、友情を敵意と勘違いし、親友の悪口を言い、敵には攻撃を加えない。『有為転変』(8.4)でカルダーノが言うように、大抵の場合は臆病で、「攻撃を加えられることに怯えている」。それゆえ、人がたまたま、言葉や行いで度を超したり、逆に、ちょっとした手順や作法を省いたり忘れてしまうと、彼らは惨めなほどに苦しむ。些細なことでも、それに気づくと「蠅を象に」まで膨れ上がらせ、いくつもの危険と不都合を自分たちにもたらすのである。いい噂や話を耳にしたり、都合のいいことが起きたりすると、彼らは喜びすぎるほどに喜び、我を忘れてしまう。しかし、ちょっとした苦難や悪い知らせにぶつかったり、自分に向けられた悪口や損失や危険を妄想したりすると、計り知れないほどに傷つき、大いに苦しみ、困惑し、意気消沈、あるいは驚愕し、耐えきれず、完全にだめになる。そうなると、すべてに怯え、すべてを疑うようになってしまう。また、それでいて彼らの多くは自暴自棄の大馬鹿者であり、向こう見ずで、軽率である。恐怖と悲しみの感情がすべて欠落しているゆえに、暗殺者になるのに適している。エルコレ・サツォニアによると、彼らは「非常に大胆であり、砂漠や危険な場所を一人で夜歩きしたりするが、何事も恐れない」。また「彼らは恋に落ちやすく、のぼせやすい」(モンタルト 21)。すぐに恋の虜になり、しかも、あらゆる相手に夢中になる。ある人を激しく愛していたはずなのに、別の人を目にすると、今度はその人にのぼせ上がる。この人の次はこの人、その次はあの人という具合に誰でも愛してしまう。そして、いつもそのとき愛している人が一番だと思っている。かと思えば、彼らの中には恋愛嫌いもいて、女性を見ることだに耐えられず、女性そのものを忌み嫌う。憂鬱症になったモスクワのある公爵は、女性の姿を見ただけですぐさま具合が悪くなったというし、ある隠者は、目の前に女性を連れて来られると、冷たくなって麻痺してしまったという。

彼らは極端な気まぐれであり、激しく笑ったり、とても楽しそうにしていたかと思うと、理由もなく泣いたり（これは良家の女性によく見られる症状）、呻いたり、ため息をついたり、物思いに耽ったり、悲しくなったり、取り乱したりする。フランボワジェールのニコラ・アブラム曰く、「理性があるとは思えない馬鹿げたことをたくさんする」。自分のことを犬だとか、雄鶏、熊、馬だと思ったり、自分がガラスやバターでできていると考えたりする。また自分が巨人や小人だったり、百人力を誇る強さだったり、領主や公爵や君主だと思い込んだりもする。また、他人から息がくさいとか、鼻がでかいとか、病んでいるとか、かくかくしかじかの病気に罹りやすいとか言われると、それをすぐさま信じてしまい、おそらく想像力の力によるのであろう、実際に言われた通りになってしまう。見たり聞いたりするごとに考えが変わる人もいるが、彼らの多くは、自分の考えに拘泥し、その点で揺るぎない。たとえば演劇を見たりすると、彼らは一週間後もその劇のことを考えている。音楽を聞いたり、踊りを見たりすると、頭の中がバグパイプ一色になってしまい、戦闘を見ると、武器のことばかり考えてしまう。他人から侮辱されれば、その思いは長きにわたって彼らを苦しめ、他人から口応えされると、同じように囚われてしまう。考えも行動も落ち着かず、つねに考えごとをしていて、「まるで悪夢のように、ありもしない光景を思い

浮かべる」。起きているというよりも夢見ているようであり、奇妙奇天烈なことを考えているのだが、どれも下らぬことで、実行不可能である。また、まさに幽霊や子鬼など、自分が恐怖し、疑い、頭に描いたりするものが、実際に目の前に現われたり、音や声が聞こえたりするようになることもあり、そうすると彼らはその幻影とつねに話をし、その後を追いかけるようになる。要するに、「彼らは夢見るように考えるので、他人が考えて夢見ることが現実に見える」（アウイケンナ）。彼らが想像し、思い描くのは、大抵が不条理で、虚しく、馬鹿げてつまらない。しかし、彼らは細かく、注意深く、しつこく、「度を超えて、いろいろなことを先取りして妄想する」（ラーゼス 1. 9）。つまらぬことに対し、まるでそれが欠くことのできない重要、重大な要件であるかのように真剣に取り組み、いつもつねにそのことばかりを考えてしまう。彼らは心のうちで激しく懊悩し、衰弱してしまうほどである。人と話をしているときも、あるいは、熱心に、忙しく他のことに従事しているように見えるときでも、彼らの頭を巡っているのは、そのつまらぬこと——恐れ、疑い、虐め、妬み、苦しみ、腹立ち、苛立ち、絵空事、空想、気まぐれ、作り事、心地よい白昼夢など——なのである。フラカストロ曰く、「彼らは尋ねもせず、尋ねられても正しく応えない」。人の言うことに耳を傾けず、上の空で他のことを考えている。何を訊いたところで、彼らは聞いていないし、従事している用件にも身が入らない。何をしても、このような憂鬱な思考に気をとられてしまい、自分の言動、あるいは本来言うべきこと、すべきこと、どこに行くべきかを忘れてしまう。突如として笑い出す人もいれば、にんまりする人もいる。しかめっ面をする人もいるし、声をあげる人もいる。唇が動かなくなる人もいれば、歩きながら手を動かす人もいる。メルクリアーレによると「いったん頭に考えが浮ぶと、それがどんなものであれ、そのことについて強烈に激しく持続的に考えてしまうのは」（『診察』11）、あらゆる憂鬱症患者の特質である。これは彼らの意志に反して起こるので、何をしても、その考えを取り除くことはできない。考えたくないと思っても、千回以上もそのことについて考えてしまい、延々と悩まされ続け、忘れることができない。一人でいても、人と一緒でも、食事中でも運動中でも、いつどこにいても、絶えずそのことに悩まされている。「彼らは、一番考えたくないことについて考えることをやめられない」。その考えごとが不愉快なものである場合は特に、忘れることができず、そのために休まることも眠ることもかなわず、つねに苦しむこととなる。ブルンナが言うように、「彼らはシーシュポスの石を転がし、永劫なる災厄、悲惨なる鞭を自分に向けているのである」。

クラトとデュ・ローランとフェルネルは普通の症状として、恥じらいを挙げる。どこか不自然な恥じらい、すなわち、場違いな恥じらいは、憂鬱症患者が往々にして苦しむ症状である。彼らはいじめられたり、嘲られたり、名誉を傷つけられたり、叱られたり、あるいは、心が乱れておかしくなったりすると、激しく苦悩することになる。そうすると、しばしば完全に塞ぎ込み、意気消沈し、落ち込んで、家から出られなくなってしまい、特に知らない人と出くわすのが怖くて引きこもり、日々の生活もままならなくなる。あまりにも子供じみ、臆病で、恥ずかしがりなの

で、人の顔を直視することさえできない。ただし、恥ずかしがりの程度は人それぞれで、ひどい人もいれば、それほどでもない人もいる。また症状が長く出る人もいれば、短く、発作的にしか出ない人もいる。フラカストロによると、この症状が反対に振れると「厚かましさと強情」になるという。しかし、大抵の場合、非常に恥ずかしがりであり、そのために彼ら（プロワのピーターやクリストファ・アーズウィックなど）は自分に提示された名誉や役職や昇進を辞退する。上手く話すことができず、他の人のように自分を売り込むこともできない。「怯えや恥らいが彼らの邪魔をし」、ものごとを上手く進められないので、現状に満足し、どんな役職にもつきたがらず、それゆえ、昇進することもあり得ない。また、この恥じらいが原因で、相当の顔馴染みでもない限り、人を訪ねて行くことはなく、言葉少なで、まったく言葉を発しないことも多い。フランボワジュールのニコラ・アブラムには、完全沈黙の患者が二人いたのだが、友人たちすら彼らに話させることはできなかったという。ロドリゴ・ダ・フォンセカの『診断集』(2. 85)に症例として挙げられている27歳の若い男性は、しばしば口をきかなくなり、恥ずかしがり、塞ぎ込んで、一人ひきこもってしまい、食事も睡眠もとろうとせず、それでいて発作的に怒り出すこともあったという。プラタが指摘するように、彼らの多くは「怠惰で、無口、やる気がなく、強制されない限り、何もしようとしない」。自分に関することでさえ、たとえそれが自分のためになることであったとしても、減多なことでは聞き入れることはない。彼らは内気で、活気なく、社交辞令をまったくわきまえず、非社会的で、付き合いにくい。特に見知らぬ相手だとこの症状は甚だしくなる。自分の考えていることは、話すよりも書くことを好み、とりわけ、一人でいることを愛する。彼らが一人でいるのは、それが心地よいからなのか、それとも怯えゆえなのだろうか、あるいはその両方が理由だろうか。ただ、私としては、彼らが孤独を好むのは恐怖と悲しみのためだと思いたい。

こうして、彼らは望みつつも恐れ、悲しみ、すべてを避けて、光を
求めることもなく、暗闇に、何も見えぬ牢獄にと閉じこもる。

また、

暗い森の中、惨めに嘆きながら、己の心臓を
食みつつ、人の足跡を避け、彷徨っていた

ホメロスのベレロポンのように、彼らは湖畔や川辺、人気のないところを好む。果樹園や庭園、私道や裏道を独り歩くのを楽しみ、桶の中で暮らしたディオゲネスのように人との交わりを嫌い、あるいは人間嫌いティモンのように、結局のところ、あらゆる人付き合いを嫌い、極めて近い知り合いや馴染みの友人でさえ避ける。というのも、彼らは、誰もかれもが自分のことを観察していて、そのうちに嘲り、軽蔑して笑い、いじめるにちがいないと思ひこんでいて、それゆえ、

一人になれる自分の家や部屋に引き込まれるのである。ラーゼス曰く「彼らは理由もなく人から逃げ、人に対する嫌悪感を抱き」(1. 9)、自給自足の生活で、一人で食事し、一人で暮らす。デモクリトスはアブデーラ市民から憂鬱症で狂っていると疑われていたが、それはこのためである。ピロパエメネス宛書簡でヒポクラテスが述べているように、「デモクリトスは町を去り、森の中や、うつろ木の中、川辺の緑の丘や、川の合流地点で、ひねもす夜もすがら過ごしていた」。そして「確かにこれは、黒胆汁に悩まされ、憂鬱症になった人にしばしば見られる症状である。憂鬱症患者は人気のないところによく行き、人の集まるところを避ける」。それゆえ、エジプト象形文字では、憂鬱症の男は、非常に臆病で孤独な存在として、巢にこもる野兎の姿で表現される(ヴァレリアーノ・ボルザーニ『ヒエログリフ』12)。しかし、この症状は——これまでに述べてきたすべての症状も同様に——、黒胆汁の割合が増えたり減ったりするにつれて、その出方が異なり、ほとんどわからない、あるいは全く認められない場合もあれば、極めて明白な場合もある。子供じみた程度の場合もあれば、ひどい症状の場合もあり、馬鹿にされる場合もあれば、憐れまれたり、驚愕の対象になったりする場合もあり、発作的にしか現われない場合もあれば、持続的に現われる場合もある。確かに、こういった症状は、憂鬱症患者に限らずあらゆる人に共通して起こりうるものだが、この病気の患者の場合、特に顕著であり、頻繁に起こり、その度合いも猛烈で激しい。つまるところ、彼らが怯えているのは、彼ら自身が疑心暗鬼のすえに考え出し想像したものにすぎず、これほど虚しく、不条理で、馬鹿馬鹿しいものはない。途方もなく、ありえない代物で、とうてい信じられるものでもなく、キメラのごとき怪物で、奇怪で不気味、画家や詩人でさえもあえては表現しようとしな。ルイス・ビベスによると、ある愚かな田舎者は、自分の驢馬が月を呑み込んだと思い込み、「月を世界に戻そうと」その驢馬を殺してしまった。ビベスはこの田舎者を茶化しているのだが、その冗談は、憂鬱症患者には大真面目に当てはまる。つまり、彼らは、極端なことや、正反対のこと、相矛盾することを、ありとあらゆる形で想像し、行動するので、その種類は千差万別、無数にある。「憂鬱症の人はまったく思いもつかないことを想像し、信じ込んでしまうので、同じことを想像した人は有史以来二人としていない」(エラストゥス『魔女論』)。憂鬱症の症状の多様性がもたらす混沌たるや、バベルの塔がもたらした言葉の混乱をも凌ぐ。ただし、憂鬱症においては、人間の顔と同じように、異なる中での類似点が存在する。たとえば川の場合、同じ水の中で泳ぐことはできないが、泳ぐ場所は同じだ。つまり、同じ楽器がさまざまな曲を奏でるように、同じ病気がさまざまな症状を惹き起こしているのである。このように憂鬱症の症状は、複雑多様で限定するのが難しいのであるが、それでも私は、総論においてこれだけ錯綜としているものを果敢にも整理し、各論に移っていこうと考えている。

*太字表記は原文がラテン語であることを示す。

テキスト

- (底本) Burton, Robert. *The Anatomy of Melancholy (Oxford English Text)* (6 Vols.).
Ed. by T. C. Faulkner, N. Kiessling and R. L. Blair. Oxford: Clarendon Press,
1989-2000.
- (参考) Burton, Robert. *The Anatomy of Melancholy (Facsimile) (The English Experience)*.
Amsterdam: Theatrum Orbis Terrarum, 1971.
- Burton, Robert. *The Anatomy of Melancholy, What It Is, with All the Kinds, Causes,
Symptomes, Prognostickes & Severall Cures of It*. Ed. with an Introduction
by Holbook Jackson. New York: Vintage Books, 1977.
- Burton, Robert. *The Anatomy of Melancholy: now for the first time with translation
and embodied in an All-English text*. Ed. and trans. by R. Jordan-Smith and F. Dell.
London: Routledge, 1931.

既訳

「第1部 第1章 第1節」	『京都府立大学学術報告 人文・社会』	第59号	2007	所収
「第1部 第1章 第2、3節」	『京都府立大学学術報告 人文・社会』	第60号	2008	所収
「第1部 第2章 第1節」	『京都府立大学学術報告 人文』	第61号	2009	所収
「第1部 第2章 第2節」	『京都府立大学学術報告 人文』	第62号	2010	所収
「第1部 第2章 第3節 第1-10項」	『京都府立大学学術報告 人文』	第63号	2011	所収
「第1部 第2章 第3節 第11-14項」	『京都府立大学学術報告 人文』	第64号	2012	所収
「第1部 第2章 第3節 第15節」	『京都府立大学学術報告 人文』	第65号	2013	所収
「第1部 第2章 第4節 第1-6項」	『京都府立大学学術報告 人文』	第66号	2014	所収

(2015年10月1日受理)

(おかむら まきこ 文学部 共同研究員)

(かわしま のぶひろ 龍谷大学 准教授)